

東京都神道青年の主張―家の将来―

清水祥彦

この六月に訪米された天皇陛下をお迎えして開かれたホワイトハウスの歓迎式典で、クリントン大統領が幕末の国学者・歌人である橘曙覧の歌を引用し、スピーチをしたことはまだ記憶に新しいのですが、もちろんクリントン大統領自身が橘曙覧のタの字も知っていたはずはなく、おそらく日本文学研究者のドナルドキーン著作から側近が引用したものでしょう。「楽しみは朝起きいでて昨日までなかりし花の咲けるみるとき」

その橘曙覧の歌に「楽しみは妻子（めこ）むつまじくうち集ひ頭並べてものを喰ふ時」という有名な歌もあり、貧しいながらも家族の愛情に満ちた歌が数多く詠まれています。

日米関係は種々の政治的問題を抱えながらも、基本的には安定した友好路線を堅持していることを、クリントン大統領は橘曙覧の和歌に託して表現したかったのだでしょうが、こうした対外的に安定した路線を維持してきたその根底には、日本全体を常に安定させて支

えてきた「家」があつてこそと思われまゝ。

ところが、こうした日本の伝統的な「家」、家族の概念に冷水を浴びせかけるような発表が、アメリカからではなく、日本の法務大臣の諮問機関である法制審議会民法部会から、つい先日なされました。

七月十三日付けの新聞によると「婚姻制度等に関する民法改正要綱試案」というなにより、敢めしい題名のもとに三案が提示されました。

A案 夫婦同姓を原則とするが、別姓も可。同姓を届け出たら別姓への変更は不可

別姓の場合子の姓は結婚時にいづれかの姓に定める

B案 夫婦別姓を原則とするが同姓も可。ただし別姓を届けたら同姓への変更は不可

別姓の場合子の姓は出生の都度父母が協議して決める。

C案 夫婦同姓を原則とするが相手の同意を得て届け出れば旧姓を「呼称」とすることが
できる

いずれの案にせよ、日本の「家」「家族」は不変のものと信じてきた者にとっては、晴天の霹靂ともいふべき大問題です。

これは単なる若者の結婚感の変化だけではなく、日本の伝統文化や歴史観そのものを変

化させるような重大な意味を含んでいることに、皆様は気がつかれると思います。

しかし深く歴史を繙くと日本の夫婦は基本的に別姓だったようです。

源頼朝の奥さんは北条政子で、決して源政子とはいわれませんでしたし、NHK大河ドラマの主人公・日野富子も足利將軍家に嫁いでも足利富子とはいわれませんでした。

歴史学の先生に伺うと、日本史上唯一の同姓夫婦の例は秀吉と北政所が、共に朝廷から賜った豊臣姓を名乗ったのが唯一の例だそうです。（二人とも名乗るべき苗字を元々持っていなかったためだそうです、同姓は日本史上では特異中の特異な例のようです）

たしかに国民の大部分を占める農民が、初めて姓をもったのは明治三年で、それまで農民層には同姓も別姓も関係がない社会だったようです。

明治四年に戸籍法ができた当時は「婦女、人に嫁するも尚所生の氏を用ゆ可き事」とあるように夫婦別姓がごく当たり前の社会でした。

文明開化論者の福沢諭吉に至っては「畠山と梶原が結婚すれば、山原という新家族をつくればいい……」という大胆かつ無節操な発言までものにしています。

明治三十一年、新民法（明治民法）で一転して「戸主及び家族は其家の氏を称す、妻は婚姻によりて夫の家に入る」と大変化を遂げ、夫婦同姓となり、家を強く主張する時代を迎

えました。

おそらく明治二三年の教育勅語発布による国民精神の形成による影響ではないかと考えられますが、こうしてみても夫婦同姓の歴史は日本史上わずか百年でしかないのです。

翻って国際社会を見ますと、平成三年ドイツの連邦憲法裁判所では「夫婦のいずれも氏をも自由に選択できなければならない」と判決を下し、日本は先進国で唯一の同姓を強制する国となりました。国連の女子差別撤廃条約が出され、締約国は次々と姓についての法改正をしている現在、常任理事国入りを狙っている日本としては、世界の潮流も無視できない一因となっているのではないのでしょうか。

一年の間に三回も首相が変わる責任なき政権と、進歩性を自称する立法官僚に振り回されている現在の状況では、日本に健全なる「家」を維持することは極めて難しい。

私たちはそうした無責任な政治家、官僚に惑わされることなく、しっかりした歴史観の上に伝統文化を守るべき正しい歩みをしていかなければなりません。

それが国民としての義務であり、また神道人としての正しい歩みではないでしょうか。

私はここで、どうあるべきかを皆さんとともに真剣に考えていきたいものです。

甦る日本の心にっぽん 御遷宮

大おお竹たけ久ひさ雄お

“甦る日本の心にっぽん 御遷宮”

もう皆様、聞き慣れました標語でございます。ご承知の通り、昨年の秋、十月二日に内宮さん、十月五日には外宮さんの遷御の御儀が、恙なく斎行されましたが、冒頭に申し上げましたのは、第六十一回神宮式年遷宮の標語でございます。

この標語を、繰り返し、繰り返し唱える程に、何と、ご遷宮の“意”を尽くした標語であらうかと、つくづく思う次第でございます。

さて、ご遷宮が、「何故に二〇年に一度か」ということにつきましては、多くの説がございます。神殿尊厳説、技術伝承説、満数整数説、曆法上の説などがありますが、これらの諸説はもとより、神宮さんで行われる年毎の神嘗祭に對し、二十年毎に行われる神嘗祭に式年遷宮の真意があるわけでございますが、今日は限られた時間内でありまして、この

神嘗祭のことにつきましては、次の機会にお話しをさせていただきます、今日は、神道的清浄観の極致が式年遷宮であるということについて、お話しをさせていただきたいと思っています。

神道の清浄観の極致と、大変難しい言葉を使いましたが、神道は、何事においても、一貫して“清明正直”の理念に基づいております。神は、清く、明るく、直く、正しい身と心を最も好まれ、この誠の心・真心を、お受け戴きます。これに対し、不浄な心身、罪穢れを忌み嫌われます。“神道は祓いで始まり祓いで終わる”といわれる如く、“清明正直”の理念に基づき、罪穢れを祓い清める一つの修行として、禊祓を修めます。

例えば、皆様が神社にご参拝されますと、先ず以て、手水舎で手を洗い、口を漱がれますが、これは、御身を清める禊ぎの簡素化されたものです。そして、鳥居をくぐり、神社の杜に包まれた神気満つる参道を、一步一步踏みしめつつ、威儀を正し、ご神前に進まれる。更に、ご神前にては、ご祈願・拝礼なされるに先立ち、祓いを謹んで、お受けになります。

この祓いの実修は、神社での禊や祓いを受けるのみならず、各家庭での神棚拝礼を通し、祓いは修めることもできるのです。

神道には、“朝鏡”という教えがございます。神棚に奉られるご神鏡を通し、ご神鏡に写

る自分自身をしつかりと見つめ、神の御心と照らし鑑み、神性を顕現することは、祓に通じるのです。

式年遷宮は、清明正直の理念に基づき、徹底したこの祓いの意味が込められているのです。祓には、罪・穢れを祓い清め、本来の、清浄な姿に立ち返らしめるのみならず、本来の活力を回復させ、新しい生命の出発、生命の甦りを、産霊・生んでいくものであります。つまり、式年遷宮は、ご社殿も、ご神宝も、装束も一切を造り直すことによって、根源の清浄を取り戻し、そこに“生命の甦り”を祈念するものであります。

私たちが、清浄な境地を体験した時、私たちは「清々しい」と感じます。清々しいと感じた時、そこには、活気ある生命が漲ってまいります。清々しい状態に立ち返れば、若々しい生命が甦ることを、私たちは生活の中で、よく感じ取っているところでございます。

例えば、一年の始まり、差し昇る御来光に浴しつつ、新玉の年を迎え、神社に初詣した時、家族一同が健康にして、新しい年が迎えられたことの慶びを、先ず以て、ご神恩に感謝し、ご神前に「ありがとうございます。今年一年も頑張ります。どうぞ、お守りお導き下さいますように」と、大きな夢を膨らませ、一年の抱負を抱き、心新たに祈念なされる。日々にあつては、朝、顔を洗い、神棚を拝し、「今日一日が恙なくありますように」

と、一日の發展を祈念なされる。このように、ご神前に拝礼した時、皆様は、清々しい状態に立ち返り、神より活気ある「生命」と「御力」を戴くのです。

年毎に、月毎に、日毎に、甦りであります。

二十年毎のご遷宮、年毎の初詣、月毎の月参り、日毎の神棚拝礼も、年月・月日の差こそあれ、全て生命の甦りであり、「清明正直」の理念に基づき、祓いなのです。

神道が「祓いで始まり祓いで終わる」といわれる所以なのです。

私は外宮の内院弁備所役として、第六十一回神宮式年遷宮のご奉仕という、無上の栄に浴する機会を賜りました。私と同じく、外宮の内院弁備所役としてご奉仕されたのが、神宮研修所の一期先輩で、大阪の住吉大社に奉務される山下先輩、犬山の大縣神社に奉務される宮下先輩のお二人でした。このお二人は、学生時代、二十年前・昭和四十八年の第六十回神宮式年遷宮にも、内院弁備所役としてご奉仕のご経験があり、遷御の大儀に臨む私たち後輩を導いていただきました。また、後輩である神宮研修所の学生諸君が、同じく内院弁備所役として務め、神宮のお膝元に仕える彼らの奉仕振りは、誠に以て見事な務めぶりでありました。先輩方々が、私たちを導いて戴いたように、二十年後の第六十二回神宮式年遷宮には、研修所の後輩達は、大いに活躍することを私は確信致しました。

このようなことから、私は遷御の儀をご奉仕して、「何故にご奉仕の榮に浴することが出来たのか」と、慎んで受け留める時、今後の新たなお役目を戴いたように思えるのです。それは、大神さまより、「その信仰を語り継げよ。」「ご奉仕の体験・感動を、一人でも多くの人に語り継げよ。」という、新たなご使命を戴いたように感じなのです。それが、信仰上におけるところの“生命の甦り”“信仰の継承”“次世代への引き継ぎ”ではなからうかと、受け留めて居ります。

“甦る日本の心ご遷宮”

どんなに立派な歴史伝統も、放っておけば次第に衰え、滅びてしまいます。しかし、人々の努力如何では、甦りつつ、永遠の生命を保ち続けることができるのです。

私は、遷御の儀ご奉仕の中、新宮の御扉が開扉されるのを待つ時、正宮内院では、庭燎の火明かりに照らされる百数十人の祭員の方々が、みじろきもせず、しわぶき一つ聞こえない静寂が続く中、新宮の御扉が開扉される重厚なその音が、浄闇のしじまに、高らかに響き渡りました。暫くし、所役の禰宜様が、正宮に帰参されてまいりました。この間、時間的には短い時間であったでありましょうが、私には、かなりの時間が経ったように思えました。ご正宮を仰ぎ拝し、さらに夜空を仰ぐと、光り放つものがありました。

それは、飛行機でした。飛行音も微かに聞こえてきます。

その飛行機が飛びかう現代にあつて、一九九三年の、今、連綿と受け継がれて来た一三〇〇年の歴史伝統を有するご遷宮が、今、甦っているのだという事を、ひしひしと実感したのです。

ご遷宮は「常若^{とこわか}」といわれるように、全てを新しくし、その新しいところに神のお遷りをお戴く、その祭りによって、御神威も弥更に高まると、信仰されています。私たちは、その御神威高まる御光りを戴き、銘々も又、若々しく、清々しく、甦らせて戴こうと念ずるのです。

“神は人の敬によりて威を増し、人は神の徳によりて運を添ふ”

ご遷宮は祓いに通ず。日々の神棚拝礼も又祓いに通ず。日々、甦りを求めて、祓いの厳修に務め、本来の清浄な姿に立ち帰り、そこに、神の御力を戴き、活気ある生命を漲らせ更にご発展されることを祈念して止みません。

どうか皆様、日々の神棚拝礼を通し、“甦る日々心のご遷宮”のお心をお忘れなきように……。

明日は我身か

葛城周佳
かつら き ちゆう よし

情報化社会と称されて以来、近年ますますラジオ・テレビ等の情報システムが発達し、戸惑いを感じる今日このごろです。確かに便利な社会になったと言えるでしょう。しかし、正確に物事が伝播するのならばまだしも、興味本位そのもので、もし間違っていたとすれば、それが一瞬に世間に流布されます。それに対する影響の責任を、一体どこの誰が取ってくれるのか大変気掛かりです。そのため各種の行事があるときには頭が痛みます。

特に例大祭の時期が近くなると、宣伝を要求される現場としては頭の痛い事です。勿論例大祭と言えば赤字そのものです。出費は黒字にはならず、いつも赤字を覚悟しています。尚更の事です。我が社の氏子の中にも俗に「情報屋」「でたがりや」と称する人々が多数います。

でも神社の運営と言いますのは、神主はもとより総代・世話人の二人三脚で成り立ち、

彼ら氏子さんも難しい点もありましょうが、導いている事を否定することは出来ません。

それを思えばA君の社が念頭にうかびます。私はA君の処へ、約十五・六年前に例大祭を手伝いに行きました。その社は、村の小さな社で、総代・御世話人を合わせても十人もいません。それなのに祭りの度、何百万円かの黒字になるとの事でした。それもそのはずです。神主を初め総代・御世話人が一致団結して、村人や信者さんに対応していました。

その社の宮司さんいわく「我が社の総代選出の選挙は、市町村議会の選挙なみ、それゆえ、彼らは大変よくやってくれています。だから直会を兼ねた慰安旅行の予算を認めている。貴方には信じられないでしょう。」と、自慢をしておられました。また、総代諸氏も「ここの宮司さんは素晴らしい。この地方では、昔は一帯で催されていた湯だて神事が、現在この社にのみ残っている。余りの荒行のため他社ではやらなくなり、うれしい事に、この社のみで細々とその伝統を守っている。我々は、それを誇りにしている云々」私にそう言いました。確かに宮司さんの齒は、口の中には一本あるのみ、後はみんな抜けていましたし、A君の齒もその神事を二・三回行ったところには、齒が全て無くなり、総差齒になっていました。余りにも強烈な荒行。煮えたぎるお湯をみて、ある修験者は逃げ帰ったとも聞きました。私もそれを信じない人が、煮えたぎるお湯でやけどをし、悲鳴を上げる

のを何度も見ました。

ただ、その社にも、希な奇祭であると言って、情報・通信等の波が押し寄せ、そのため種々の問題が生じました。甚だしいのは博覧会の余興にとか、全く信じられないような取材の為、祭礼の日時を変更して欲しい等々の要望がなされる始末。A君や宮司さんは「これは代々伝わっている大祭の神聖な神事であり、余興とか、日時の変更は出来ません。」と、常に断っていると言っていました。断ると必ず放送局側は「テレビに出たくは無いのか。他の神社ではテレビに出るために日時の変更はもとより接待までしてくれるのだが、そうすれば神社の宣伝になり神社側にも好都合ではないですか。わかりませんか。遅れますね。」

しかしA君や宮司さんは「テレビに出るためとか、宣伝の為に神事をしているのではなく、あくまでも氏子や信者さんの為に神様の前で挙行するものですから。他の神社では認めても、我が社では認めることが出来ません。ただし、あなた方が当社に合わせていただけるのなら、取材等は自由に、また少しの便宜を図ります。」そう答えていました。

私は誠に立派な態度であると感じました。私自身よく見聞きます。放送局・新聞社と称する輩が取材に来るとなると、一瞬に豹変する同業者が数多くいることを。

皆様方も同じ思いと思われます。テレビを見ていれば一目瞭然、取材第一主義で神様等はそっちのけ、一体何を祭り事とし神聖とするのか、興味本位、疑問の一語です。

ただし注意しなければならないのは報道側にも問題がありましようが、「情報屋」にも問題が多々あります。知り合いの報道関係者が言っていました「彼らを見捨てることは出来ないため、取材したくない時は無理難題を持ち出さなければならぬ。」

A君の社でも、総代・世話人の中の何人かの俗に言う「でたがりや」がいつも不満ありげに「今年は何社来てる。事前に各放送局・新聞社に連絡しているのだけれども来てくれない。他の神社のように少しは接待をし、宣伝をしてもらわなければ精がでない。神社の人には困ったものだ。」と、話し合っているのを、私も少なからず耳にしています。

それが一因とは思えませんが、一心同体となって神社側と総代・世話人が行動していたのが、数年前の事です。突然「今年が最後の祭りになる」と大祭にも拘わらず略式の祭りを当の宮司さんが泣きながら奉仕していた姿は大変いたたましいものでした。そして今現在、一つの文化財と言える神事が残念なことに消え行こうとしています。

しかし私の処でもしかり。祭りの形態が情報通信の発達で、本末転倒の感じがする昨今とあいなり、いつ問題が噴き出さかわかりません。神様を無視し、神を祭らない祭りが。

我が社の例大祭には豪華絢爛な太鼓台という屋台があります。本来は神輿渡御の露払い的存在の屋台が一人歩きをし、今や屋台そのものが神様を脇へ追いやって、逆にその主とばかりに祭りの中心へ移動しつつあります。その根源は図らずも情報・通信等の発達により、豪華絢爛な屋台そのものが「祭り」と考える放送局・新聞社の人々の主観で、神社側がいくらその点を説明しても変えられてしまっています。また致し方のない点もあります。この屋台に対する出費は大変なもので、昨年の例ですと、青年団員各一人十万円、その他の各家庭は一万円の協力金となっています。そのうえ、神社の祭りに参加しても神社からお金はたいして貰えません。でも神祭りとは全く関係の無い所へ出ると、市の観光課等から、より多くの援助金が貰えるし、宣伝も市がしてくれるから大変助かると言います。

このような情報化社会には「情報屋」・「でたがりや」と言う人々が大変たくさんいますから、いつ彼らが社の神祭りから離反していてもおかしくない状態です。

それに対して私も少なくとも次の点を解決出来るならば、いつでも宣伝をしましょうと。

一、現在は交通社会なのだから誰か駐車場を提供して下さい。

一、人が集まれば必ず大小便・ごみが出るからそれを引き受けて下さい。

まだその他も多数ありますが、その二点を提言すると、さすがに声は今の所ありません。

この情報化社会において情報・通信等を無視することは出来ません。しかし、それらに左右されるようになってみいかず、正に「明日は我身か」頭の痛い今日このころです。

・飯積神社権禰宜 愛媛県西条市下島山甲一五八九

藤原歌劇団の音楽鑑賞に想う

渡辺みどり

P T Aの婦人学級の皆さん、先達て文化庁推薦の藤原歌劇団が、むつ市においてになり、孫の通っている中学校で、演奏されたのを聴いたのでその時の様子を私がお伝えします。

これは文化庁の事業で東北北海道の中学校を対象に、芸術鑑賞教室が毎年開かれ、今年
は県内で一校、本校が選ばれたわけで、吹奏楽部が県大会に何回か出場している関係と、
むつ下北の中心校だからというので、候補に上った様でした。受入れる学校側も初めての

事であり大変だったと思います。

期日は平成六年五月二十六日、場所は体育館、世界的に有名な藤原歌劇団がおいでになる。心踊らせながら入場す。

後の方にはお祭の山車が出て祭囃子の笛や太鼓で「歓迎セレモニー」。裃を着ているのは皆中学生。会場の盛上りが拔群。

そして全校生徒の大合唱の歌声は会場に響き、歌劇団の人達と生徒達、聴入る父兄が一つ心に結び合う。歌劇団の人達は男性八名女性十二名。先づ一年、二年、三年の合唱に始まり、その指揮と伴奏を生徒が受持ち、これが中学生かと思われるレベルの高い演奏。

そしてオペラ本番、きれいなソプラノ、混声合唱、四部合唱、さすがプロの生の演奏、何て素晴らしいと唯々感嘆の溜息ばかり。

きらびやかな服装でなく、それなりに上品な装いでした。歌劇団の指揮者の先生は、生徒の間に入ってにこやかに質問を受け、生徒とのコミュニケーションを大切にしてくれる様子は、他の音楽会ではとても見られない場面でした。質問の時は恥かしがって誰も云わないのではないかと心配でしたが、何と立派なこと、堂々とはっきり応答したのに驚きました。

最後にイタリア語によるオペラ「椿姫」が歌われたのです。

私が五十八年前の中学生の頃、先生につれられて郷里の弘前で、創始者の藤原義江先生のオペラを聴いた時とそっくりで、想い出の感激が鮮明に蘇り、興奮の夢が中々さめず、思わず劇団の控室へ行ってお礼をのべました。劇団の人はとても喜んでくれ、「このむつ市で藤原先生のオペラを直接聞いたとおっしゃられて大変嬉しく思います。どうかいつまでも歌を愛して長生きして下さい。」と有難いお言葉を頂戴しました。

鑑賞会は三時間、自然に会場が暗くなり、優秀な吹奏楽の演奏の中、全校生徒がペンライトを持って、蛍が飛びかう様な幻想的な雰囲気で幕が閉じられました。

生徒の皆さん良くやってくれました。

大成功で感激の涙がとめどなく流れ、胸が一っばいでした。又先生方の御苦労には頭が下ります。

皆さん方のお子様達は、話声一つするでもなく、エチケットをわきまえて、実に立派で頼母しかったですよ。学校では勉強も部活も一生懸命やって、子供ながらに苦勞し、又楽しく学園生活を送っています。だから子供の立場になって理解してやらなければならないと思いました。

そして一日中、精いっぱいやって疲れて帰るのですから、すぐガミガミ小言を云われた

ら反抗するのも無理はありません。御苦労さんと一言云って上げて下さい。お勤めで家に居ない時は、紙に書いて机に上げておけばよいのです。

世間でよく聞く話ですが、子供の前で隣の誰ちゃんと比べる人があります。親はけんそんして云うかもわかりませんが、子供自身は大いにきずがつき、自信をなくします。

又、兄弟の差別も絶対によくありません。

大人になってもコンプレックスを感じ、へそ曲りな性格になって、将来家庭生活に悪い影響を及ぼします。余り甘やかすのもよくありませんが、なるべく長所を認めてほめて上げるのが大切だと思います。母親がしっかりした愛情を持って子供に接し、親が先に感謝の心を持ち、物の大切さ、尊さの範を示したならば、子供は非行に走らないと思います。ドイツの復興は女性の力が偉大であるときえ云われています。

近頃、賽銭泥棒があつて警察に届けました。おまわりさん曰く「一部の中学生の仕業で、捕えても全く罪の意識がなく、大変こわい事です。」と云われました。この学区からはそんな子が出ない様に願いたいです。孫の紘子が六年生の時の防犯の標語を想い出しました。

「万引は一瞬の心のすき、一生の心のきず」全くそうだと思います。次の世代を背負う子供を育てる皆さんの責任は重大です。

社会情勢の芳ばしくない昨今、子供は誰を信じればよいのでしょうか。一番信頼出来るのは親です。円満な家庭です。

子供は家の宝、国の宝です。日本の国が世界に誇れる立派な国柄であってほしいと願うものです。今回の鑑賞会にのぞみ、祭囃子とオペラの音楽の素晴らしさ、人の心を引きつけ感銘を与える魅力は偉大であると痛感しました。

皆様の御健勝とお幸せをお祈り申上げております。

・大覚院熊野神社権禰宜 青森県むつ市新町三一五

歴史の変遷と神職の心

おお
しま
もり
ひこ
大島守彦

父のあとを継いで宮司のつとめをやるようになり、早、十七年が過ぎました。今迄やっ

てきた事、今から神職としてやっていかねばならぬ事についてお話し致します。

私は神社の境内にある家に生れ、永い間この目で見てきた事、聞いて来た事が今更のよう
に思い出され、今もあの時のような気持でありたいと、つくづく思う昨今であります。

五、六歳の頃から祭の案内から手伝いをしてきましたので、その頃からの祭のあり方、
人の心の变りかたが時代の流れと共に感じられます。昭和のはじめ小学校にいつている頃
は、氏神様の祭りといいますと町をあげてのお祭りで、町長、役場の関係者も祭服を着て
祭典にのぞみ、神職の奉仕も多く、楽人による奏楽もあり、学校の先生生徒も参列し、今
思えば夢の様な祭典でありました。各家庭では、親戚、親しい人達をまねいてお祝いし、
親睦を計り、夜は浪曲や余興があり、今もお祭りがくるとあの頃の人達の顔や、夜店の情
景等がなつかしく思い出されます。

大東亜戦迄はいろんな政事、お宮中心に行われ、事があると、社務所に集っており
ました。神社の事は氏子皆力を合せてやっておりました、境内も清掃され、崇敬の念が深
く、時代の流れとはいえ、今の世情と比べますと思ひもありません。

私は小学校、中学校の頃はずっと父の手伝いをし、神社の事をしておりました。戦争が
激しくなり、昭和十八年海軍予科練に志願入隊し、二十年八月終戦により復員しましたが、

二十年の頃は上海海軍航空隊に在隊し、戦況の悪化に伴い、日本はどうなる事か、内地は焼土化されてしまうのではないかと、真剣に思った事もありました。飛行機はなくなり、特別攻撃隊による防戦の道しなくなっておりました。

不安の中で毎日を送っておりましたが、八月十五日の終戦により、もう帰ってくる事はないと心に決めていた故郷に帰ってまいりました。なんとも云えない夢のような気持ちでした。戦争が終わりますと神社は大きな変化が起りました。終戦後間もなく連合軍が神道指令を発し、国家神道を廃絶させました。占領中のことではあり、それは何ら論議の余地もなく、国家神道制は解消されてしまいました。

それからは、国民は突然の事にて大きな心理的ショック混乱を経験し、それは今もつづいております。この大きな終戦による歴史の大変遷により、戦後五十年、先祖伝来の日本人としての心が大きく変化致しました。今つくづく思う事は、この様な状態がいつ迄つづくか、時代の流れと共に大きな変化のくる事が案ぜられます。あらゆる祭の様相が変わってきております。

明治大正生れの人達が少くなり、世代交替が行われておりますが、祭りの心、日本人の心、奥ゆかしい心を如何にして伝え継承して行かれるかが心配であります。神社に集る機

会が少いので、どうしても神や先祖に対する考えがとぼしくなってきました。境内に建っている石碑等は、先祖が心を込めて奉納したものでありますが、ただ呆然と見ているだけのような状況で、その中に秘められた敬神崇祖の気持は、わからない人が多くなってきました。今私の奉務神社の境内に忠魂碑・招魂社がありますが、現在二社に於て区民による慰霊祭が行われております。これまでは遺族会・郷友会の人達が力を合せて行つてまいりましたが、年が経つにつれ参加出来る人が少くなつてしまいました。世話の出来る人が少なくなり、会の運営が出来ない状態となり、会主催での慰霊祭は中止という事になりました。淋しい限りであります。国の為に尽された方々の慰霊はつづけなくてはなりません。官司をしている私も予科練で特攻志願の経験もあり、多くの戦友が戦死しておりますので、慰霊祭については自分がやらねばならぬ事と思ひやってきました。何時迄もやらねばならぬと思っております。しかし私がいなくなつたらどうなる事かと案じられます。この慰霊祭をつづけるには、この心を残していかねばなりません。区での会合でこの事に話し合いが行われ、年輩の人達では世話は無理という事になり、若い人達で宮総代が中心となつて続けていくという事になりました。そしてその第一回慰霊祭を、三月二十九日（日）に天候にも恵まれて盛儀に行う事が出来ました。おろそかになりがちな祭を如何に

して続け、日本人の心を残していかなばならないか、神職としてやっていかなばならぬという事を心に秘めながら、生命の続く限り力をつくして後継者に伝えていかなばならないと思います。

・六所神社宮司 福岡県筑後市大字徳久二一七

太陽を拝んで

山^{やま}本^{もと}行^{ゆき}隆^{たか}

朝、太陽を拝するとき、無量無限の力・勇氣・智恵が湧いてきます。これが神氣と呼ばれるもので、今現在、いのちを戴いて生きていることに対し、おもわず感謝せずにおれません。誠に有難いことです。

皆様の中には御存知の方もあるかと存じますが、明治二十二年、島根県松江の町にひと

りの英国人が松江中学校の英語の教師として来日しました。彼の名はラフカディオ・ハーンと申します。彼は散歩が好きで、毎朝、下宿を出て町を一巡するのが日課でした。日本に来てからは、何かしら日本人の生活に、大変興味を持つようになりました。殊に街並みの朝の家々を歩きながら見ていると、どの家もどの家も、太陽が東の空から昇り始めると、東の戸口を開けて太陽を拜んでいる家族の姿でした。力強い柏手を打ち、熱心に唱え言をしながら拜んでいる光景です。彼はこの光景を見て「ああ、何と日本人はすばらしい国民だ。素直で、大自然を畏敬し、大自然の巡りに合わせて生活している立派な民族だ。自分はこの日本に来て、今、住んでいることが誇りに思えてきた。」毎朝、この光景を見るたびにそう思うようになり、遂に日本人として帰化することに決心したのでした。彼の名は小泉八雲。後に彼は、いろいろな日本人及び日本歴史のことを書き遺し、この世を去ったのでした。すばらしいことと思いませんか。

ここでもうひとりの外国人を紹介しましょう。彼の名はJ・W・T・メーソンと言います。彼はアメリカのシカゴ市で生まれ、ハーヴァード大学の学生であった頃、日本では、明治三十八年、日露戦争が終わったとき、日本がロシアと戦って勝ったことが大きく報道され新聞を賑わせました。世界地図を拡げて見て一番大きな国はロシアです。虫眼鏡でも

見にくいほど小さい国・日本が戦って勝ったのですから、彼の驚きは普通ではありませんでした。何故、日本が勝ったのか、日本人には特殊な精神性があるのではなからうか、次から次ぎへと疑問が湧いてきました。是非とも日本へ行って、実際に日本人に接しながら、日本の研究をしたいと念願し、彼は新聞記者になり、日本という国の勉強を始めたのでした。日本の古典、『古事記』『日本書紀』を読むほどに、日本人の精神性の根本は、全国津々浦々にある神社であることが分かり、神社が国民の生活の基盤であったことが理解され、神道について凡そ二十年間にわたり、古典を中心に勉強してきたのでした。殊に神話を貫いている神ながらの精神、日本人の持っている敬神崇祖の心、共存共栄という天照大神の稲穂の神勅から見られる神道の原理等、書物だけでは理解することは難しく、遂に日本に来ることを決心し、日本各地の神社に参拝することを念願し、昭和七年、漸く日本に来ることが出来たのです。

メーソン氏はハーヴァード大学での先輩にあたる今岡信一良先生が、東京芝にある正則学院の理事長であったことから、先生を尋ねて来たのでした。果せるかな、彼が日本に来て最初に見たものは、日本人が朝起きて顔を洗うと、先ず一番初めに日の出の太陽を拝んでいる姿でした。また、神棚、ご先祖を拝む姿。更に、月初めには殆どと言ってよいほど、

氏神さまにお参りしている人々の姿。そして一年を通じて十数回ある氏神さまのお祭りには、親子が手をつないで参拝する清々しい光景を見るのでした。正月の参拝はどこもかしこも凄いい人並みであることは言うまでもありません。彼は今岡先生の通訳により、全国の神社を巡り、地域によっては外国人から見た日本と題しての講演も依頼された、と今岡先生から伺いました。彼は日本の歴史及び古典を研究すればするほど、日本人の神観念、神道の生活観がよく理解でき、殊に人は神の子であり、死んでまた神になる神観念、また神話にあるイザナギ大神が天照大神に高天原を治めよと命ぜられる。

高天原とは暗いところのない太陽の光が満ち満ちているところであり、自ら「吾れ日住宮」と名乗り、太陽に帰一されたことを考えるとき、天照大神を太陽神として捉え、太陽を大自然の中心とし、命の根源として畏敬し、太陽を毎朝拝みながら太古より生活してきた日本人、また先祖への敬神崇祖の心をもって生活し、全国津々浦々にある神社を、生活・文化の中心とし、生かされていることへの感謝の心をもって生活してきた日本人の姿こそ実に素晴らしいと感じ、伊勢の大神宮を宗旨として、お伊勢参りを一生の喜びとしてきた日本人の生活態度は、メーソン氏の心を大きく動かしたのでしょう。彼はこうした日本人の姿を見て、日本人として帰化する決心をしたのでした。日本人の太陽に対する畏敬と、

太陽こそ人類の命の親であることを確信するに至ったのです。勿論、太古における世界の人々は、すべて太陽信仰であったのです。時代が進むにつれ人知が発達し、いろいろな人間同志の争い、また種々の問題が起こり、悩みが生じて、宗教が発生するに至り、悩みを解決して安心立命を求めてきたのです。本来、太陽の照るところに悪魔の発生は無く、人類は太陽の道に従って歩むとき、幸せを招くものであると先祖から代々聞かされ、受け継ぎ、信じて来たのであります。

メーソン博士は、このような日本人の日々の在り方、生活、神まつりが、人間としての歩むべき道であり、太陽をはじめ大自然そのものが教祖であり、教義・戒律であることから、神道は普遍性、寛容性を持ち、世界の如何なる国の人々も理解が得られるということから、近代、急速に神道の考え方が見直されて来ているのであります。

メーソン博士は、自分の研究してきた神道と日本人の考え方を昭和七年十二月に『神ながらの道』、昭和十五年四月に『神道神話の精神』という題で二冊著して出版し、日本人の生活を支える精神性と、神道の普遍性を記述されました。アメリカ人でありながら、日本の神道に帰依され、日本人として立派に帰化されたのでした。

メーソン博士は、一旦帰国されていましたが、昭和十六年五月十三日、ニューヨークで

病歿されました。六十三歳でした。死後、遺言書により「私の遺骨は必ず日本に埋めて下さい。帰化したのだから。」とかかれていた。宛て先は、今岡信一良先生であったのです。今岡先生は、昭和二十二年、戦後最初のアメリカ行きの船に乗り、日本人として帰化されたメーソン博士の遺骨を遺言どおり引き取り、東京多摩の今岡家の墓の隣に、立派に石碑を建てお祀りされていることを皆様にお伝えいたしたい。

このように、『古事記』『日本書紀』を通して見る神社神道の教えは、全世界人類への教えであることを再認識すると同時に、その普遍性から見て、恐らく宗教の源ではないでしょうか。私はこのことを宗源と申すことにしています。それだけに、今後、神社神道の教えは、世界平和実現に大きな貢献をすることになると確信するものであります。

太陽の教えは、太陽の如く人類は常に明るく生きることです。天の岩戸開きの教えの如く、日の神が岩戸に隠れたときは、真つ暗闇となり、「さばえ」なす世になったのであり、ここに高天原の神々が相集い相議り、天岩戸から日の神をお出し申し上げて、再び高天原（世の中）は明るくなったと記されています。この岩戸開きの教えこそ現代の世を救う大きな教えであり、全世界の宗教者が相集い、太陽の心をもって太陽を拝むとき、清い心、明るい心、正しい心、直なる心となって、あらゆる宗教の教義を超えて、宗教者同士の、

また民族同士が共に対話をなし、宗教、民族の今日の問題を解決する道が開けてくるのではないだろうか。人類は今、光を求めているのです。今こそ、大破いをして、一人一人の人間の体内に光を入れなければなりません。

それは、太古から人類が実践してきた、そして日本人によって受け継がれ、引き継がれてきた朝の太陽を拝む慣習を呼び戻し、日本全国の全戸はもとより、全世界の人々が、朝一番に太陽を拝んで、明るい神気を体内に入れ、大自然の偉大な力、智慧、勇気を受け、世界を明るくしようではありませんか。

去る七月八日には、スペースシャトル・コロンビアに乗り込んだ宇宙飛行士・向井千秋さんは、宇宙実験に取り組み、また七月十七日から三日間にわたって木星へ彗星が衝突するという宇宙の出来事を見るにつけても、太陽の律儀な軌道を基本として、宇宙の軌道に乗って廻ることが宇宙の法則である如く、大自然の教えに従って歩むとき、人類は永遠に生きることが出来るものであります。この大自然の動き、巡りそのものが神道の教えなのであります。

我々の住む地球は、今や汚染されつつあります。人類及び万物が永遠に生きられるよう、太陽を中心に、太陽を命の根源として一斉に感謝の気持ちで拝む心になったとき、世界の

平和が実現出来るのではないでしょうか。

太陽を拝む運動を全世界に向かって提唱するものであります。

生かされていることに感謝し、太陽に報いる人間としての道を示そうではありませんか。

・椿大神社宮司 三重県鈴鹿市山本町一八七一

御社頭に額きて

松^{まち}
本^{もと}
スミ子^こ

桜花と散り九段に還るを夢に見つ

鉄艦屠らん我は行くなり

長野県出身で二十三歳の故浅川久之大尉の辞世の歌であります。

鹿児島県の知覧の特別攻撃隊の基地に参拝致しました折に拝見させて戴きました。

花の盛りの青年がひたすらに国をうれい、故郷を偲び、父母の姿を思い、はらからの無事を念じながら南海に散って行かれた数あまたの英霊の前で、ただ涙の中で胸つまる思いは、一緒に行かれた皆様も同じ思いであられた事と存じます。

戦前に生をうけた大部分の皆様のみならず、戦中戦後と生きてこられた方も息をのみ、あふれる涙をふく事さえ忘れ居られました。

話は変わりますが青春と云う時が私にもあった様でした。

未だ青春ではなく、幼い恋とも名がつかない未だ幼くて、心がですが、恋とも名がつかない位な春でした。

戦いがきびしくなり、動員の生徒として軍需工場に配置され、精一杯に生産に務め、誰れしも目がまわる様な状況でありました。

忙中閑とも申しましようか、よく本を読み、色々な事を話してくれる兄の様な青年がいました。

とある日突然に召集が来たとの事でした。

何でも教育召集とか云っていました。

すぐ帰って来られるからと入隊して行かれましたが、五、六月してから「入隊するから

駅まで来て欲しい。」との便がありました。が、どうしても行けませんでした。その青年とは再会する事が出来ませんでした。

終戦後、風の便りによりますと、ビルマ戦線より日本の土をふむ事が出来なかったと聞きました。

駅まで行けなかった事が残念でなりませんでした。時は移り変わりましたが、又生活の変化もありました。

万葉集の中の防人の歌の一首。

白波の寄そる浜辺に別れなば

いとも術無^すみ八度袖振る

真情あふれる此の歌がしっかりと思われます。でも半世紀過ぎた今日、靖國神社の御社で会えたのです。数回お詣りは致しましたが、御本殿に静かに坐していると、しっかりとお会いする事が出来たのです。頭の中が一杯になり、涙さえ出ないのです。ただ喜びで一杯でした。

人と魂の通ずる事を知りました。

九段会館で遺族の方とお会い致しました。

福岡県の方と云われ、話しているとその中に「靖國神社をよろしくお願い致します」とおっしゃられました。胸をつく思いです。

石井寿夫先生の著書の中に「平らけく安らけき国」を作り、道義を重んじていかなければならないとお話がありました。

オドロオドロしている日本の現況です。後に続く者を信じて、尊い生命を捧げられた靖國の神に、どうしておわび申し上げたいのでしょうか。経済の成長ばかりを中心に、自己中心の事ばかり考え、道義もすたれ行ってる世の中では、どうなっていくか不安ではありませんが、靖國神社のみに、恥じない様に「平らけく安らけき国」になる様に努力して行きたいと思っています。

その責務を負っているのが、君に仕へる妻であり、母であり、女であるものの大きな務めではないでしょうか。生み育てる力は、大きいのです。

よりよい日本のために。

・諏訪神社宮司 長崎県長崎市向町三一四

エピソード

高尾一胤

今日、日本の社会は高度に産業化され、都市には高層ビルが立ち並び、またコンピュータを始めとする様々な情報メディアによって、生活が充たされるようになってきました。情報化社会といわれる今日、日本人の社会生活の変化のテンポも、大変めまぐるしいものがあります。しかし乍ら、こうした社会生活にしても、無原則に営まれてきたわけではなく、ここには正直、清浄、勤勉、調和といった行動の原則を見出すことができます。これらの原則は、明確なる価値感として意識されてきたものではなく、あくまでも伝統的な生活心情として、私たちの生活の中で共有化されてきたものです。こうした生活心情を形成する上において、重要な役割を果たしてきたのが神道といえます。

神道では清らかさが尊ばれ、また、そうした清らかさは、個人の心持ちとしては、正直として表現されてきます。天照大御神から祖先が授かったとされる稲、その稲作りを通し

て、日本人は勤勉さを学び、また、稲作りには、たくさんの苦勞を必要とするところから、人々の協力、調和が求められてきました。

こうした共同体の営みの中から神社が生まれました。ここでは様々なお祭りが行われ、大切なコミュニケーションセンターとして機能を果たしてきました。神社は地域社会に聖なる秩序をもたらすものであるとともに、人々はここに集い、ともにお祭りを奉仕することを通して、共同体の一員としての自覚を新たにし、社会生活を営む活力そのものを得てきたわけです。高層ビルが立ち並ぶ大都市。そうした大都市の中にも神社が祀られ、一見、混沌とした都市にも安らぎと秩序をもたらしています。地方の都市にも町にも、私たちの生活があるところには必ず神社があり、そこでは、さまざまなお祭りが地域性も豊かに行われています。今日の日本の発展も、こうした神々と私たちとの深い結び付きの結果、もたらされてきたといえます。まさに日本は祭りの国といえるでしょう。

・ 惣社白山神社宮司 富山県高岡市二塚町一三四三

ああ靖國の神様は

相原牧雄

掛卷くも畏き、靖國神社の御祭神を、仰ぎ奉りて、謹話申し上げるのを光榮に存じます。明治の頃、「陸海軍人の戦士者の忠魂を靖國神社に祭らせ給ひける日」に、高崎正風先生は「戦ひて死ぬべきものと今ぞ知る皇御国の益良武男は」と、詠嘆されましたが、昭和の御祭神に於かれましても、神国日本護持の御為に、海に、山に、野に、空に勇戦敢闘せられ、或は名誉の戦死を遂げられ、又は戦病に倒れられるなど、齊しく悠久の大義を貫かれ、尊き御国守りの御神と成らせられ玉いし御事は、実に莊嚴の極みに存じ奉ります。

我国古来の皇御軍は、総て聖戦!! 今次大戦も亦、然りで、悲しくも昭和二十年に「敗戦」という形を以って終結致しましたが、祖国を防衛し、大東亜諸民族開放の為、神定めの聖戦でありましたるは歴史の真実でございます。

後に当のマッカーサー元帥すらも「日本の戦いは自衛の為であった」と洩らしており、

ウェップ裁判長も亦、「日本天皇は神様に違いない」と、尊皇の一端を告白してあり、開戦の大詔に仰せの如く、誠に已むを得ざる時に至りて、立ち上ったのであります。

「勝てば官軍」流に、戦後の茶番劇東京裁判で、正論は押し退けられ、強引に歴史を曲げて、「日本悪し」と断定し、日本弱体化占領政策を敢行、その毒酒に、全身を蝕まれたる人民も多く、何事ぞ、国民の最高幹部内閣総理大臣すらも、三代にわたって、「日本は侵略国であった」「深く御詫びする」と、軽率にも公言、良識ある内外人より、眉をひそめて嫌わるのみか、国の名誉と、国益とを、激しく破壊するが如きは、天人相共に、相許さざる国賊的妄動であります。

勿論、御英霊達も、これでは、侵略戦争に斃れたる御事と相成り、真実とは逆で、さぞかし、御憤り玉いある御事と、御詫びの申し上げ様もございません。

戦い終りて、天を仰いだ徳富蘇峯翁は、「顧みて悔ゆる所は無けれども、力足らずばかりかりけり」と嘆かれ、其の数年後に、木下甫先生は「みいくさは、神謀りかも畏こしやアジア、アフリカ国生れたり」と、詠嘆せられました。が、私達も亦「戦いは正しかりけり真心を尽くせし人は神と成り玉ふ」「英霊の御神徳で御国は繁栄し有色諸民族自由を得たり」と、敬謝顕彰の誠を捧げ奉ります。

ああ靖國の神様は、「たとえ肉こそ体こそ、碎けて飛びて散り失せて、また海底に朽ちぬとも、神霊は常に生きまして、貴方の御家や此の村や、皇御国を守られて、ある事だけは確かです」靈驗拝受奇談は山程御座います。

近來の天変地異人災は、現下の混乱脱線の、政治外交教育等々を一日も速やけく「祖国本来の光り輝く正道に立ち戻せ!!」と、神々様よりの御警告と拝承、猛反省の毎日でございます。

万が一にも「物で榮えて、魂で亡ぶ」事に相成りましては、申訳がありません。

私達生き残りの者は勿論、全日本人が、天壤無窮の神勅「豊葦原千五百秋瑞穂の国は、世々吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫、就きて知らせ。行矣。宝祚の隆えまさんこと、当に、天壤と窮りなかるべし」の、御神勅顯現成就に、全身全力を捧げ奉るべきであります。

明治天皇様の「大教宣布の詔」を、拝誦申し上げます。

「朕恭しく惟ふに、天神天祖極を立て統を垂れ、列聖相承けて之を繼之を述べ給ひ、祭政一致、億兆同心、治教上に明らかに、風俗下に美はし。而して、中世以降、時に汚隆あり、道に顕悔あり。今や天運循環、百度維新、宜しく、治教を明らかにし、以て惟神の

大道を宣ぶべし。

よって、新たに宣教師を命じ、教を天下に布く。

汝群臣、衆庶、それ斯の旨を体せよ」と。

かのフランス人で、神学、法学、哲学博士ポールリシャル尊大人が「日本国民には七つの榮譽と七つの使命あり」とて、

「万国に優れて統一ある民!! 汝は来るべき一切の統一に、貢献せんが為に生れ、又た汝は戦士なれば、人類の平和を促さんために生れたり!!」と、詩い上げておられるのに、心の耳を、天眼靈智を開き、全日本人誰もが、自覺と、自肅と、自尊とを高め、敬神尊皇!! 第二の天の岩戸を開くべき秋であります。

終りに臨み、明治維新を拡大強化、光明化して、世界全人類が、幸福平和繁栄、大調和する―地上の高原、地球一家を招来する大神示―奇靈にも、明治維新改元満七十七年目当日の朝、即ち昭和二十年十月二十三日の早朝―鐘の山と金陵の別名ある、中国大陸の要「南京」に於いて、天命拝受の「世界維新実現大祝詞」を奉唱して、天地八百万の神々様の、靖国護国の神々様の一層の御加護を乞ひ奉ります。

あまついのちとちのころ
天靈地魂

よろずはうまれそだつなり
万物育成

わけてひとこそのちなり
人間靈長

あまつことはちにおどり
天音地躍

ひかりあかるくみちみてり
光明遍満

ひとりひとりがかがやきわたる
人間靈光

あまつことをちにおこなえば
天言地行

いつでもこがみのか
常在神国

すべてのひとはかみとなる
人間即神

あめはなりちほうごく
天鳴地動

ふしぎはくものごとくわく
瑞雲奇蹟

これかみのこのちからなり
神人神力

あまつちかひはちになりて
天願地達

おほいのちにゆるぎなく
神聖不動

みことみことはたのしみばかり
神人歓喜

ああ靖國の神々様は、国を愛する人びとを、守り導き助けて下さいます。ああ靖國の神々様を礼拝して敬謝合掌顕彰の誠を捧げ奉ります。

・ 切幡神社宮司 広島県安芸郡海田町砂走一三一—二六

日はまた昇る

高^{たか}山^{やま}定^{さだ}基^{もと}

今日も、また太陽が昇る。昨年と異って晴天続きの暑い夏である。

晴れる日は、立派な祭り日和である。

今頃、雨の心配もなく、祭りが行われるのは真に珍しい。

祭りは、神幸に初まり、御旅所にて一夜奉仕、翌日、本社へ還幸、そして例大祭、続いて直会、種々の奉納行事が納められる。

岩戸神楽の奉納を以って祭りは収められるが、その最後の舞台が、天の岩戸開きの場である。

お怒りによって天照皇大神が、天の岩戸に籠られ、世の中は真暗となり、悪霊共が天地に満ち溢れ、何も出来ず、万民が大いに困惑した時、思兼神は、神集に集われ、謀りに謀られて御神楽を奏し奉り、岩戸を少し、開け、外の様子は何事ならんと覗き奉りし時、手力男命はその大力を以って岩戸を押し開けました。

世界は明るく、照り輝き、悪霊共は何処にか消滅し、万民安楽、素晴しき世になりました。

世の人々は、それは神話の話であり、神主共の都合の良い話である。

今時、昔の話は流行らないと、思っている人が数多存在している。

時は、平成五年、永雨による冷夏の年を迎え戦後以来の米騒動が起った。

如何に陽の光が大切か、生産の基の力であるか、という事を強く強く再認識させた事件である。

米あまりとの認識で休耕田を増し、コンピューターで米の在庫を計り、最新の管理技術をもって適正量を維持しているつもりであった。

工業管理の技術を最高のものと信じ、不作の年のある事を考えておかなかったのである。否、足らざる時は輸入すれば良いとの安易な考えからの大失敗であった。

中国の米、アメリカの米、タイ米、手当り次第に数量を確保する為に外国の米を買いきり、国外の販売に向けた。唯、米の数量を確保すれば、事足りるとの考えからである。食味の悪い米は日本国民に敬遠される結果となり、今後、如何に処分すればよいのか、更に、一騒動である。

大東亜戦争の敗戦により、経済立国、経済大国の道を歩んだ日本、公害を撤き散らし、一途に働いた日本国民、そのしるしありて、国力は増大し、今日の経済の繁栄をもたらした。

日本円が外貨との変動相場に移行して以来、その実力を認められ、一米ドル対三百円、又一ドル二百円と変動し、最近に至っては一米ドル対百円を切る状況となった。

東南アジアや奥地の人々に日本円に直して月給五千円。或は月給二万円に対し、日本の若者は月給二十万円の時代を迎え、黄金の国ジパング近代版の様相を呈するようになった。急激な円高により日本国内企業は、その企業努力にも拘らず、八十五％は赤字の恐れあり、そして海外に企業立地を考えずには存立が危いという時代を迎えた。又大学の新卒生は、就職がうまくいかない。リストラ最中に新卒学生を採用する企業が少いのである。

他方、海外から見れば日本は夢の国である。

高額収入を得られるので密入国しようとする者が後を断たず、入口取締りに手をやいている現在の有様であり、近年ますます増加している。

物見遊山する連中は、海外旅行が円高の為割安になった事から、ハワイへ、グアムへ、オーストラリアへ、アメリカへ、ヨーロッパへと、次々に海外渡航者数が、新記録を立続ける有様であり。政治は乱れに乱れ、一年間に三度も総理大臣が変る状況であり、更に、日本魂も失する政治発言続きにより、正に混乱、暗黒の国状である。

貿易輸入の拡大を求めるより、一米ドル対百円の水準を維持した方が、日本に対しアメリカ優位とのアメリカ政府内の見解もあり、ここ当分、円高の状態は解消されそうにない。外国に卑下した政府の方針は、日本を日本たらしめるものでなく、寂しくも悲しく、い

きどおりを感じるものである。

そしてこの暗黒状態は当分の間、続くものと思われる。

暗闇は暗ければ、暗いほど、永く続けば永いほど、光は明るく輝くだろう

天神地祇を奉じ、神職一同、日本精神の発揚に努め、亦、光り輝く世界大日本の再成に勤めようではないか。

・八坂神社宮司 福岡県北九州市小倉北区内二―二

秋祭斎行について

吉永吉治

今日は、平成六年度の秋のお祭りでございます。おめでとうございます。何時ものことで恐縮ですが、一寸時間をおかりいたして、お話し上げたいと思います。今年は昨年と

は違って、全国的にも豊作のようであり、もちろんこちらの方も御同様であり、有り難いことと心から神の恵みと感謝いたし、よろこんでいる次第です。秋の祭典は一重に鎮守の神々への御礼の行事なのであります。春からこの秋の収穫まで、本当に有り難うございましたという労苦に報いる祭なのであります。

昨年は二十年一度の神宮の式年遷宮の年でありました。内宮、外宮を始め別宮の神々に常に新らしく、みずみずしい御殿にお鎮まりいただきたいという日本人の素直な心情の表われの行事なのであります。そのおめでたい一千三百年来の遷宮の年でありました。皆さんにも、つい先日参宮をしていただき、檜の香もかぐわしい姿を目の当りにしたわけで、世界にその例を見ない古式さながらの儀式でございました。日本民族の大神への御奉仕の伝統を立派に守り、再現することができました。誠に素晴らしいことであります。

申すまでもなく、伊勢神宮は吾が国神社神道の根源であります。即ち天照大神は天にましまして照り給う神様の意で、日の神のことであり、仁愛広大無辺で、誰に対しても、やさしい神であり、しかも女性としての思いやり厚く、日本の神話での最高神なのであります。その天照大神が天孫邇邇芸命に降臨の折にお与えになったのが、八坂瓊曲玉、八咫鏡草薙剣の「三種の神器」であり又「天壤無窮の神勅」いわゆる「豊葦原の千百百秋の瑞穂

国は、これわが子孫が王たるべき国である。皇孫のあなたが行って治めなさい。さあ行きなさい。宝祚の栄えることは、天地と共に窮りないであろう。」ということであります。なお天津日嗣とは天皇の地位を意味するけれども、その中には天照大神が国民の糧として、自ら天つ神諸々に授けて、共食した稻（命の根）を捧げ、新嘗のお祭りに奉仕しなさいという意味も含んでおるわけで、即ち、「わが高天ヶ原にきこしめす斎庭の穂^{いなほ}を持って、又^{まさ}当に吾児に任せまつる」という神勅として伝えられているのであります。そして今に受継ぎ伝えられ、実践されているのであります。即ち第四十代天武天皇以来、とりきめられて、新天皇、即位元年の秋に行なわれる大嘗祭として、伝えられているのであります。天皇が祭祀主と呼ばれる所以でもあります。その天皇が今において春の日に稻種を自ら蒔かれ、苗を仕立て、そしてその早苗を田に移植をされ、秋には収穫をされて天神地祇に又神宮に奉獻なされ、共食をされるという、世界に例をみない天皇様の最も大切な一年の所作といわれている次第です。後に全国民挙って、八百万の神々への感謝の祭りが秋の祭なのであります。

ひるがえって、春の祭りは、無事に種子が発芽して、すくすくと育つようにとの祈りの祭りであり、夏の祭は、作る人々の内外の罪、とがめのお祓い、又作られる物の虫、水、

風の害を逃れるその祈りの祭なのであります。丁度人生の通過儀礼に当るようなものなのであります。例えば人の一生で、誕生、命名、成人、結婚、死、そして子孫へと受継がれてゆくという繰り返えしであり、そして、その時々の特質を具備してゆく生々発展の諸現象というべきものなのです。そして一貫しているものは、移り変りを完全におこなう祈りの連続なのであります。

常に平和を願い、万民へだてなく、神をいただいて正直信明に裏打ちなされての祈りの生活の連続ということであります。神に捧げる、神道の祝詞の中には、人を殺すとか、害を加えるとか、いためるとか、しいたげるとかの感情表現は、どこにも見当りません。和の心のみであります。日本は、日の本、即ち、平等に恵みを与えられる、大和、平和のかたらい以外、何ものでもありません。

さて、当、三嶋神社の主祭神は大山祇の神であります。配祀神として、大国主之命、豊城入彦之命、木花佐久夜毘売命達であります。

大山祇神は大山津見神ともいわれ、各山々の精霊を統轄支配する存在として崇められた神であり、伊弉那岐・伊弉那美命との間に生まれた神であります。この神は山の神の中で一番偉い神であると同時に、多くの有名な神の父としても知られております。出雲の大蛇

退治で泣いていた老夫婦は子供であり、その娘の櫛稲田比売は孫に当ります。又邇邇芸命の妻となられた木花咲夜毘売命は娘であります。その他多くの神々をお生みになっておられます。又山の神であると共に水と海の神としての信仰が古来からあります。主な神社としては、愛媛の大山祇神社、三島市の三嶋大社、伊勢原市の大山阿夫利神社、山形の湯殿山神社などがあげられます。

さて皆さん、今、世上、大東亜戦争終結五十周年を迎えるに当って、歴史への無知の恥ずかしさも棚に上げて、自らが加害者意識を強烈に主張し、聖戦を侵略戦争と自認し、謝罪に明け暮れ、尽忠愛国に殉じた先輩、諸英霊に吐をかけるような行為に現を抜かし、朝貢外交に狂奔し、物笑いになっている態度は、全く様になっていません。

真に売国奴的な行為であるといわざるを得ません。マスコミ、迎合せる政治家、宗教家、あなたの方の態度は全くの自暴自棄、自虐以外の何物でもないことを自認していただきたいと思う次第であります。このことを皆様確認していただきたいと思う次第です。失礼いたしました。

避けて通れぬ道なれば

田中 正也

つい先達てのことでございますが、私たち高齢者ばかりの会合の席で『避けて通れぬ道』という変った話題が飛び出したのでありました。その避けて通れぬ道というのは、老の道なのであります。たわいなしと思いつつも、約一時ばかり討論めたことを行うことになったのであります。私にも順番が廻って参りましたので、大略次のようなことを申したのであります。

どうしても好むと好まざるとに拘わらず通らねばならぬ道ならば、大いに闊歩しようじゃないかと少々強がりと言ったのであります。だから、ぐずぐず通っていては、くたぶれるばかりです。そうしてこの道は、氣の持ち方によって険しかったり、又なだらかであつたりするものであります。どうせ通らねばならぬ道であるならば、平坦なるに越したことはありません。いずれにしても楽に通るには、いろいろな工夫をいたさねばなり

ません。私はその第一要件に健康であることを挙げます。高齢になれば体力は、たしかに衰えます。しかし体力の衰えなりに、元気でありたいものであります。世上には、さまざまな健康法が唱えられ、又喧伝されています。私はそれらを否定するものではありませんが、私の第一にとり上げたいのは日々の食事であります。食事は神の恵み、祖先の恩であります。その食事を好き嫌いなく、なんでもいただくことと、毎日の生活のリズムを崩さないこと、この二つを健康保持のために実践してほしいと思うのであります。そういったしますと、自ずと「足るを知る」ことになりますので、不平不満が生じません。従って老の道に障害物は生じないという理論でございます。

その次に心得たいと思いますのは、常に気を若く持つということです。気を若く持っておりますならば、常に視野が広がり、話は弾みます。新しい事象にも比較的早く理解ができ、よく吸収することができます。身につけるものまでが小ざっぱりいたします。日本語にこういう言葉がございます。「老醜」ろうしゅう。年をとって姿や形がみにくいという意であります。高齢者を侮辱し、忌み嫌った感じの悪い言葉でありますが、こんな言葉も無くなるのではないのでしょうか。

最後に申しあげますのは、物事を素直に考えることであります。これはちょっとむつか

しいかも知れませんが、勉めてみたいと思うのでございます。高齢者は豊富な経験の持主であり、昔執った杵柄から、ついつい横槍を入れたがるものでありますが、これは余程の考慮の上でいたしたいものであります。

人間誰しもが通らねばならぬ道は、神の摂理であります。摂理に逆らい、又これに反すればどうなるかは説明の必要はありますまい。

・ 矢合神社宮司 滋賀県東浅井郡虎姫町中野四〇四

御英霊の御前に誓う

古^{ふる}川^{かわ}雅^{まさ}恵^え

第十回神道講演全国研修大会東京大会が、平成六年七月二十一日より二十三日まで靖國神社で開催されました。会場が靖國神社。本當に私は感謝で一っばいでした。今年、弟登

の五十年祭で護國神社にお参りしました。

昭和十九年四月十日金刀比羅神社は春祭りで賑わっていました。その中に久方振りに軍服姿の弟登が尺八を右手に握り来山してくれました。私は嬉しかった。初めて見る陸軍航空兵の晴姿でした。私を見るより早く、『お姉さん、僕の尺八と、お琴を合わせて下さい』と言う。私は「これだけ沢山の参拝者で溢れているのに、——どうしてお琴を出されますか。」とたしなめると、『外の境内でもいいでしょう。』と強引に言い返す。……私はよっぽどの事とは思いましたが、心にゆとりと勇気がなかったのです。私は其のとき、弟の願いをどうしてきけなかったかと悔やまれてなりません。然し、後のまつりになってしまいました。

弟は昭和十九年五月二十八日ニューギニアで戦死しました。弟の必死の願いを受け入れなかった無情な姉だったのです。五十年過ぎても、済まないという心でわびる弟への想いに胸がいたみます。然しこの度の研修大会で私は、靖國神社の御本殿に額づき弟のみ霊に深々と頭をさげておわびする事が出来ました。

戦後四十九年、日本人の意識の変化が氣になる現代です。日本の行末が案じられる今日、国民の代表たる前細川総理の侵略発言や、戦後処理として、今になって国会で謝罪決議が

浮上、油断のならない世相を思います時、国会運営過ちなかれと祈らずにはおれません。

昭和四十三年、沖繩はがくれの塔の慰霊祭に参拝した時の事でございます。

沖繩はがくれの塔には、佐賀県出身の出征兵士、南方海域、沖繩で戦死された御英霊二万数千名が祀られております。参拝遺族団一行は佐賀県庁前を出発し、その夜は鹿児島県のホテルに一泊して、翌朝乙姫丸で沖繩へ出航する事になっていました。

鹿児島県のホテルに到着し一泊した、その夜の事でございます。眠りについた私は、枕もとに立った弟登の姿に驚きました。

昭和十九年四月十日、金刀比羅神社に來山した時と同じではありませんか。軍服姿に右手にしっかりと尺八を握りしめています。

思わず「登さん」と弟の名を呼び目が覚めました。夢だったのです。これが夢枕に立つという事でございましょうか。

『一人の姉が自分が祀られている沖繩はがくれの塔の慰霊祭にやってくる。何と嬉しい事か。あの時、姉は自分の尺八とお琴の合奏を聞いてくれなかった。考えてみるとお祭りの時だもん、仕方がなかった。お姉さん、よう来てくれた。有難う。待っていた……。』私は弟登が喜んで私の枕辺に迎えにきてくれたのだと、一人で斯う考えて本当に、弟のみ霊

がよろこんでくれたと思いました。

み霊は生きている。私はそう信じています。

平成五年十月、御縁があつて元佐世保海上自衛隊、ペルシャ湾派遣掃海艇部隊補給艦と
きわ艦長両角一等海佐様御一行が御参拝下さいました。テレビで世界中を驚かした湾岸戦
争イラク、フセインのクウェート侵攻、ペルシャ湾に敷設された機雷を揚げに日本海上自
衛隊の出動だったのです。日本自衛隊の優秀さを世界中に賞賛され、一五一名無事御帰還
になった海上自衛隊員を指導、訓練された重要な御立場の勇士を目のあたりにみて頭が下
りました。

私の失礼な質問に間髪入れず御答え下さった事は、『私は先輩の鎮まられる靖國神社へ
喜んでまいります。先輩のもとへまいりたいのです。もとの軍人と同じ気持です。国の為
ならいつでも命をなげだすつもりです。日本は天皇制が一番大切です。国の護りについて
は、自衛隊にお任せ下さい。』と胸を叩いて力強く御答え下さいました。御英霊のみ声を聞
いた様に思えてなりません。みたまは生きておられます。もとの日本軍人と変わりないこ
とを実感して嬉しゅうございました。自衛隊の特攻精神に護られている日本。日本のテレ
ビ、新聞、報道のゆがみを思います時、私達日本人は、自衛隊の方々への感謝が足りない

と残念でならないのです。靖國神社に鎮り給う御英霊は、自衛隊員のみ心の中に生きておられるのです。私はそう実感致しました。“七度生れ変りて護國の鬼とならう”と戦死なされた御英霊の雄叫びでございました。この御英霊は、自衛隊員の胸内深く生きて、日本を護って下さって居ります。

私は亡びぬ日本軍人の尊いこの心こそ、世界平和を祈る日本神道を守り、日本の歴史と伝統を護る国体護持の命の炎となってもらふ事を信じて感謝と感激で一っぱいです。

靖國神社の大前に、感謝の祈りと共に、神明奉仕の誠に徹して一段と力強く踏み出す事を誓いました。

・金刀比羅神社禰宜 佐賀県佐賀市金立町大字金立三三四九

自然とのかかわり

二に
橋は
一か
彦ひ

地球環境問題が叫ばれて久しくなりますが、森林が砂漠化しつつあるとか、酸性雨によって、木の枯れが進んでいるとかのニュースはあとをたちません。

身近な事柄に目をむければ、小川や池の魚の数は少なくなり、ホテルはよほど環境がよいところでないと見ることは出来ず、ゲンゴロウやタガメなどの水中小動物は、ほとんどみかけなくなりました。

昆虫が飛ばなくなったり、魚が住めない川があったりすることは、人間が生活するに快適な環境とはいえないでしょう。

琵琶湖の水をきれいにと、湖畔の市町では中性洗剤を使用しない申し合わせをしていると聞きます。琵琶湖から流れ出る水は、京阪地方に生活する人々の命の水であり、自然に淘汰できない物質は、生命をおびやかすものであることを知り始めたからでありましょう。

しかしながら、私たちは物質的な生活の豊かさにメリットをみつければ、一方で音をたてて崩れゆくものがあっても、目をつむってしまいうきらいがあります。また、崩れゆく環境によって肉体も精神もおかされつつあることを知らうとしないきらいもあるようです。私は三十年余、ボーイスカウト運動にたずさわってきました。この運動の中にも近年、環境の問題をプログラム化して活動を展開する機会が多くなりました。

今年の夏、八月三日から七日の間、大分県久住高原で、日本ジャンボリーが開催されます。テーマは「蒼き草原より未来へ」―地球にやさしいジャンボリーをめざそう―です。

テーマを注釈しますと、(1)自然を守り、明るい未来を築くためのキャンプをします。(2)野外を美しくするためのマナーを守ります。(3)火の取り扱いには最大の注意を払います。

(4)自然の中に生きる動植物を大切に保護します。というようになります。

申すまでもなく、「地球にやさしいキャンプ」は、環境を大切にする心を植えつけ、自然に対して心くばりをして行うものですから、活動の中で意義の高揚を図り、自然環境の重要性を唱えごとで終わらせぬよう指導し、実践してゆくものとなっております。

ここで活動の事例を紹介してみましよう。

まず、水の入ったガラスコップに赤か青の食用染料を二・三滴入れる。この食用染料を

汚染物質と考えることにする。染料はどんどん広がって水全体が染まる。それが汚染物質の広がりを示す。次にセロリを色のついた水に差す、セロリは木・草、また、地下水を飲む人間とを考えてもいい、セロリをそのまま二〜三時間おく、二〜三時間たったならセロリの変化を調べる。茎をきってみると色のついた水が吸い上げられて、茎の上の方まで上っている。

水を汚染することで、植物をも汚染しています。水に何かをすれば、それが人間はじめ、すべての生物に跳ねかえってくることを、この実験で具体的に教えるわけです。

地下から水を吸い上げている植物は、その水に含まれている汚染物質も一緒に吸い上げており、地下水を飲料水として利用している人や動物は、やはり汚染物質を体に取り込んでいることになります。

きれいに澄んでいるはずの地下水が、今どんどん汚染されているというのは、皆んなの知るところであります。他人ごとのように考えているきらいがあり、その対策・努力は充分されているとはいいかねます。

他人ごとのように思われている現実を次の事例で説明してみましよう。

あるグループに、一日のうちに「一番よく考えごとをする」のはいつか。その答えがで

たら、次に先週のある日「一番よく考えごとをした」ときのことを思い出してみてもらおう。そして「その時にどのようなことをしよう」と思ったかをメモしてもらおう。それが終わったら各々発表してもらい、準備しておいた縦に「自分をとりまく環境」横に「時間」を示した表の中に書き込んでゆく。結果をみると、ほとんど全員のものが、自分たちに身近なことを中心に考えていることがわかる。家族や友達、近所の人や学校の人など関係あること、しかもごく近い将来のことを考えている。自分たちの住んでいる町・国・地球のこととは考えていない。

これは、公の問題を考えるのに慣れていないことです。たとえば地球を救うことに関心があっても、私たちはほとんどそのことを考えていないのです。なぜ公のことを考えるのがこんなにむづかしいか、それはたぶん私たちが、自分の生活のことばかり考えて、ほかにも大事なことがあるのに、それに目が向かなくなっているせいでしょう。人間がどれほど自分の毎日の生活のことばかり考えているかよくわかります。

宇宙飛行士の向井千秋さんが、地球の美しさを伝えて来ております。このかけがえのない地球の命を永久に守ってゆくには、私たちは一つでも環境問題について考える癖をつけてゆかねばならぬと存じます。

例えば、洗面や歯を磨いている時に地球のことを考えてみる、そうすれば水を節約するために水道の栓を止めるようになるでしょう。使われていない電灯、見てもいないテレビを消すことも、エネルギーの節約に役立つことになるでしょう。また、生活の豊かさを求めるあまり、生命をおびやかす物質までとり込んでいるのではないかと考えれば、洗いのをする時に中性洗剤の使用は止め、フロンガスの入った製品の使用もひかえ、むやみに農薬を使わなくなるでしょう。

今、私たちは、すぐにでもやれるものから実行に移して、かけがえのない地球を守るため、自然とのかかわりを考えて、調和と共存の道を確立してゆかなくてはなりません。

・愛知県神社庁参事 愛知県名古屋市熱田区白鳥二一六―一二

侵略戦争について

黒田明司

今年の六月、父の五十年祭をお願いしたいと、見知らぬ男性がお宮に来ました。五十年祭？ もしや戦争で亡くなられたのではないかと思い、事情を伺いましたらやはりそうでした。昭和二十年七月一日にフィリピンで戦死されたのでした。

五十年祭当日は、大阪や岡山など遠方から兄弟や子供、お孫さんも集まり久しぶりの再会を喜び、つもる話に花を咲かせていました。中には『当時私はまだ三歳だったから父のことはよく覚えていません』とおっしゃる方もいました。残された御家族は大変な御苦労があったのではないかと思います。しかし今日ここに五十年祭で小さなお孫さん等からもお参りをうけ、さぞお霊もお喜びになり、今後共このご家族の幸せを守りつづけてくれるのではないかと思います。それよりも何よりも、戦争で亡くなられた尊い命の犠牲の上に、今日の日本の繁栄があることをつくづく感じた次第です。

さて来年は終戦五十年、原爆や空襲の恐ろしさ、さらには「日本が侵略戦争をした。」など、マスコミや教育の現場では語られているが、それは真実でしょうか？ それよりも戦争勃発の原因は何だったのかを、知ることは大切なことだと思います。そこには日本が決して侵略戦争などしていないことが、はっきりわかります。その一つの原因が、日本と中国の関係にあります。満洲における日本の権益は、日露戦争後、ポーツマス条約や北京条約で、ロシアから獲得し、これを清国も認め、国際的にも承認されていました。そして日本人が移り住み、尊い血と汗を流し、莫大な経費を投じてやっと築き上げた土地です。当時の中国の状況は、国民党と共産党との内戦がくり返えされる中、日本人迫害や、日本人虐殺事件など、中国側からの度重なる挑発や攻撃がありました。特に昭和十二年、北京の通州というところで約二百人の日本人が虐殺され、日本人に大変なショックを与えました。又、日本の権益を奪おうとする米英露などの陰謀と干渉があったのも明白な事実です。そしてついに米英中蘭は対日経済封鎖を狙って、A B C D包囲網を形成し、対日石油輸出を禁じたり、報復措置をしてきました。以後、日本は戦略物質の入手が不可能となり、自存自衛の為の進出を考えざるを得なくなっていくのです。

このような状況下、日本政府は最後の望みをかけて、粘り強く対米交渉を続けましたが、

昭和十六年十一月、米國務長官ハルは、日本に対する事実上の最後通牒ともいうべき「ハルノート」をつきつけてきました。その内容では、日本は支那及び印度支那より一切の陸海空軍兵力及び警察力を撤退させ、支那に於いては蔣介石の政府を認め、満洲の權益を放棄せよということでした。それまでの日米交渉での日本の主張をことごとく無視していたため、日本側は事実上の最後の通牒と受けとめたのです。米の対日戦争を決意した通牒でした。そしてついに昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃で大東亜戦争が勃発したのです。

後の東京裁判では、インドのパール判事の判決文には、「今次の戦争について言えば、真珠湾攻撃の直前に、米國務省が日本政府に送ったものと同じような通牒を受けとった場合、モナコ公国やルクセンブルク大公国でさえも、合衆国に対し^{はこ}戈をとって立ち上がったであろう。」と記されています。

又、後に占領軍最高司令官マッカーサー元帥は、「日本の戦争は自国の安全保障のためであった。」と証言しています。

大東亜戦争は侵略戦争だったのでしょうか？ 侵略戦争とは挑発を受けていないのに一方からしかける武力攻撃です。大東亜戦争において日本は挑発を受けていないのに、一方的に武力攻撃したのでしょうか。

そうではありません。大東亜戦争は我が国自存自衛のために已むを得ないことであったと、『開戦の詔書』にも明白に堂々とその理由を明示されました。日本のみに責任がある侵略戦争などと断定するのは、明らかに歴史事実に反するのみならず、パール判事やマッカーサー元帥、近年の諸外国における公正な評価と認識にも逆行するもので、それに何よりも、日本の国家意思に忠実に、勇敢に戦って斃^{たお}れられた英霊に対する許しがたい冒瀆といわざるをえません。

・四山神社禰宜 熊本県荒尾市大島町八一八

夫を慕う五十回忌

河野ミチコ

平成四年一月十日、私の母方の叔母、須山スミエは戦争未亡人としての五十年の生涯を

静かに閉じました。

訃報を聞き駆けつけて下さったクラスのお友達は、不幸続きの人生であったにもかかわらず、余りにも美しく安らかな、そして安堵しきった死に顔に

「まあ、スミちゃんは、」と絶句されました。苦しみや悲しみを、共に慰め励まし合つて来た戦争未亡人の方は

「スミちゃん、楽になったねえ。父さんが、待ちうてよ。早よう行ってあげなさい。二十五で別れて、もう七十四、あんまり年を取りすぎて、父さんに分かってもらえるじゃろうか、のうスミちゃん。」とまるで、生きている人に話すように語りかけて下さり、周りの人々の涙をさそいました。

つい、一ヶ月前に、夫、須山量治命の五十回忌を済ませたばかりでした。叔母の戦争未亡人としての生涯を振り返ってみますと、

昭和十六年七月十八日夫を戦場に送り出し、夫の勤務地の大阪から二人の幼児を連れて帰郷して参りました。昭和十七年十二月二十八日、ガダルカナルで夫が戦死しました。

女の細腕で二人の子供を育てる苦難の道が始まったのです。これといった特技をもたない叔母は、致し方なく、或る日やみ米の売買に出掛けました。ところが尾道駅で警察に摘

発されたのです。ベテランの方はお米を放棄し蜘蛛の子を散らすように逃げ去ったそうですが、初めての叔母達は何がなんだか分からないで、おろおろしている間に警察に連行されたのです。近くのお店に預けていた二人の幼児は、夕暮になっても母親が迎えに来てくれないので、シクシク泣き出し困りはてたお店の方が、警察へ連れて行って下さったそうです。

当時五歳だった娘は、悲しそうな母親達がうなだれて座っている真ん中に、真白いお米が山のように積み上げられているのを見て、「いったい誰があのお米を食べるのかしら。」と小さな頭で真剣に考えていた事等、今でも、はっきり目に浮かび、思い出すと泣きたくなるそうです。

戦後、因島市にも工業団地が出来、就職した叔母は働きに働き、やっと生活も安定し、身内の者も皆はっとしました。

ところが叔母が体の不調を訴え病院へ参りますと、子宮癌の四期。「できるだけの事はしますが生命の保証はできません。」と言われ、祖母は二人の孫のことを案じ、「代ってやれるものなら代ってやりたい。」と泣き崩れました。術後、病院の方のお話で、この地方きっての名医が執刀して下さったことが分かり、一同どんなに感謝したかしれません。当

時は、子宮癌で術後五年以内で亡くなる方が多かったのに、叔母は七十四歳に到るまで再発もなく過ごさせて戴きました。

晩年つらい難病のリウマチと戦わねばなりませんでした。お見舞に参りますと

「ミッチちゃん、私ね、父さんの五十回忌を済まさねば、死んでも死にきれないのよ。」と口ぐせのように申していました。

五十回忌の法要を自分の手でしたい一心で、慎ましく慎ましくして蓄えたお金で家を改築し、立派な仏壇も購入しました。

法事の当日、二人の孫にだき抱えられて、離れから木の香もかぐわしい母屋の仏間に座り、不自由な体で、お灯明、お線香を上げ、亡き夫の霊前に深々と頭を下げ、暫し礼拝していました。そして娘に

「今まで生きてこられたのは、お父さんの、お加護があつたればこそよ。父さんの御恩を忘れないように。」

と、くれぐれも申しつけていました。

当節では、健常者でも両親を看たがらない人が多いと聞きますのに、糖尿病のため目の不自由な体で、娘夫婦は実によくリウマチの母親を看取りました。

先だって佐古幸嬰先生のご講話の中で

「靈魂は不滅、御霊は常に家族をお守り下さいます。」との感動的な実話を拝聴しました。

叔母が数々の苦難の道を力強く生き抜いて来られたのも、亡き夫、須山量治命の御霊がお守り下さったればこそと、しみじみ思わせて頂きました。

・齋島神社 広島県三原市宮沖町六五七―三

底を叩くとき

加藤英司

私たちの祖先は、民主主義よりはるかに次元の高い道義を実践して、今日の日本に発展してきたのであります。

しかるに、経済大国となり、平和が続くと、いつしか為政者たちは、口を開けば「国家国民のため」と言う美名で、国民をあざむき、汚職に始まり、怨念による権力闘争に終始した結果、三十八年間続いた自民党政権は昨年七月崩壊し、細川連立内閣が誕生したのであります。

八月十日、細川元首相は就任後の記者会見で「大東亜戦争は侵略行為であり、間違った戦争であった」という暴言をはき、さらに八月十五日、天皇皇后両陛下が御臨席なされた戦没者追悼式典の英霊の大前で、土井衆議院議長は「私たちの過ちによって惨たんたる犠牲を強いられたアジアの人々との和解を私たちは手にしていない」と言い「戦後補償法案」の成立に意欲を燃やしたことを、絶対に許すことができません。

さて、これらの発言に端を発し、来年の終戦五十年を前に、本年五月二日には、三木元首相夫人ら四十六人が、衆参両院議長に要望書を提出したのであります。

その要望書の内容は、戦争責任、謝罪の特別決議、戦後補償問題調査特別委員会の設置、補償実現のための立法措置、厚生省が建設を予定している「戦没者追悼平和記念館」の在り方の再検討であります。

これに呼応した、従軍慰安婦問題に取り組んでいる「戦後補償実現をめざす市民ネット

ワーク」では、五月十九日に戦争責任謝罪の国会特別決議と、戦後補償問題特別委員会の設置を求める請願書に、三十一万人分の署名を添えて提出したと言われ、「南京問題」「朝鮮人強制連行真相調査」「慰安婦問題の教科書への正しい記述と強制労働現場の保存」等を、続いて誕生した羽田内閣に要請していたのであります。

その羽田内閣も二ヶ月で総辞職、喜んで成行きを見ていましたら、自民党があらうことが社会党と手をにぎり「村山内閣」を誕生させたのであります。

村山首相は、今月一日の初記者会見で、大東亜戦争の認識について「日本があれだけの惨禍をもたらした責任は謙虚に反省すべきだ」と述べるにとどまりましたが、その後十二日に、来月十五日の閣僚の靖國神社公式参拝に関し「できるだけ自粛してほしい」と言い、これに対し、自民党の森幹事長は、午後の記者会見で「閣僚の信条もあり、政治家としてそれぞれの判断で対応されるのが大事だ」と言い、閣僚個々の判断に任せる考えを示した結果、公式参拝ではなく、個人として参拝するといった閣僚は、三名だけの本当に情けない事態になったのであります。

ながながと細川侵略発言後の経過を申し上げてきましたが、この現実を直視するとき、それでは大東亜戦争開戦以来、戦陣に倒れ護國の英霊としてまつられた、二百有余万柱の

犠牲者の方々は、侵略の手先だったのでしょうか。

また家族のため、国のために、東洋平和のためということを信じ、最愛の肉親と別れて戦陣に赴き、無念の死を遂げた戦没者の方々、さらに一家の支柱を失い、辛酸をなめた遺族の方々の身の上を思うとき、こうあっさり侵略戦争だと言われたり、靖國神社にたった三名の閣僚しか参拝しないことに、強い憤りの念でいっぱいなのであります。

我が国の将来を思う時、一国の総理大臣が「先の戦争は侵略戦争で、間違いだった」との暴言に対し、それなら国を信じて死んでいった人々の気持ちとは一体どうなるのでしょうか。

指導者が国を誤る時、罪のない内外の多くの人たちが犠牲となる事実、そしてその人々に慰めの言葉を語りかけるのが、一国の指導者たちではないでしょうか。

思い出して下さい。昭和天皇の終戦の詔勅で「堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ビ」というお諭しを。そして私たちの父、母、祖父、祖母は、占領政策の名の下に、勝った国が負けた国を裁くという、国際法に抵触する不思議な裁判の結果、我が同朋は戦犯に問われ、千名以上の方々が処刑されたのであります。

また一国の基本法である憲法すら、彼らの意のままに作り変えられ、伝統、文化も思う

ままに改ざんされたのであります。

あまつさえ肇国以来、我が国の道義の根本理念である、神のお血すじを受けた天皇が、神から授けられた国家として、この国を開き、その伝統をもって国家を成立せしめてきた神道を、神道指令で変革させられても、耐え忍び、講和条約を締結するための努力がなされてきたのであります。

講和条約というのは、過去の戦争の問題をすべて精算するものであり、国際法上の準則なのであります。

このような歴史上の事実も知らずして、諸外国から正式な外交ルートを通じて謝罪の要請もないのに、わざわざ戦後五十年もたった今、謝罪決議を国会でやろうとしているのであり、これにくみする売国奴政治家を、絶対に許してはならないのであります。

この決議を許すことになったなら、早くて五年、遅くても十年、神道どころか道義国家そのものが亡びることになるのであります。

来年にむけて謝罪国会の機運が上昇すればするほど、私は危機意識をもって熱い血が騒いでいる毎日なのであります。

こよなく我が国を愛する日本人、国を思う憂国の人々、そして神社人の皆さん、どうか

次代を担う青少年に「侵略者」の末裔という罪悪感を背負わせ、愛国心はもとより、日本人としての誇りさえ喪失させる、来年の謝罪国会阻止のための署名運動と、導きの言挙を、お願いしたいのであります。

己はどこまで行動するか。

己はどこまで売国奴に挑めるか。

己はどこまで靖國の神のみこともちを、具現できるか。

己はどこまで我が国の礎になれるか。

来た。時が来た。靖國の神が御照覧の時が来た。

平成六年七月二十一日。底を叩く時が来た。己の底を叩く時が来た。

・阿多由太神社宮司 岐阜県吉城郡国府町木曾垣内一〇一八―二

つぐない

初^{はつ}山^{やま}吉^{よし}凡^{かず}

靖國の宮に御霊は鎮まるも おりおりかへれ母のゆめじに

本年は戦後あしかけ五十年という年を迎えました。靖国神社に於ける神道講演研修全国大会に出席致しまして、同志の皆様と共に研修出来ること、心の喜びでございます。

実は私の郷土、福岡県豊前市立岩屋小学校の校庭に建立されている、忠魂碑の御霊前に於て、百柱の御霊五十年祭を遺族会の主催にて、平成六年四月五日、桜花咲き薫るなか、斎行されました。

当日は町民の皆様のお参拝と共に、郷土芸能神楽の奉納もあり、御英霊百柱の御霊も、およろこびのことと拝察致します。

しかし私達は、御英霊に対する御霊祭に終ることなく、この忠魂碑の建立より現在にいたる道のりを考えなくてはなりません。

忠魂碑は昭和三年十月吉日建立とされています。

昭和の初期は、日本国にとっては経済的には底をつき、苦しい生活の時代でございませう。地区の皆様は、昼は野良仕事、夜になるとつかれた身体にむち打ちながら、忠魂碑の台石や、ほの石を、道のり、二〇キロメートルを運ばなければなりません。

職人様は、木をけづり“そり”を作り“そり”にはロープを取付け老若男子の皆様は一寸きざみに、月の明りをたよりに、何ヶ月もかけて運ばれ、ご婦人の皆様は食事の準備に、大変でございました。口には言いあらわすことの出来ない苦勞でありましたと、老人等は申しています。

現在のごとく、すぐれた機械も無く、私共には考えられない苦勞だったと思われます。

しかし、その忠魂碑も立派に建立されました。

日本国も日清、日露、大東亜戦争と続き、出征されます我が子や、我が夫を、戦場に出す見送り、また戦場にて戦死をされた、御英霊の御遺骨が御遺族にひきわたされます。すべて忠魂碑の前にて行われたとのこと、なんと切ないことでした。

昭和二十年八月十五日終戦と共に、その忠魂碑も一夜のうちに取りこわしの命令。

時の村長様を初め、村会議員の皆様も協議に協議をかさね、忠魂碑の三字をセメントで

つぶし、ペンキで“平和の塔”と書き替え保存致したのであります。

そして、毎年／＼遺族会の皆様は“平和の塔”の前にて、慰霊祭を斎行致してまいりましたが、時あたかも、戦後四十年の節目の昭和六十年に、遺族会の会長様初め区長様等が協議を致し、忠魂碑の復元を致し、十年後の五十年御英霊百柱の御霊祭を斎行致す約束がなされ、本年四月五日に、盛大なる御英霊百柱の御霊祭を斎行することが出来たのであります。

一人の老人が背には野菜をせおい、両手には息子のすきであった“おはぎ”を持って、忠魂碑の石段の前にすわり、わしも年をとった。現世のわかれであろう。靖國神社に鎮まる息子に会いたい、足腰も弱った。経済的にもゆとりもない。この忠魂碑をとうして靖國の宮に鎮まる息子にと大粒のなみだ。

参拝されていた皆様も心を打たれたのであります。

遺族会の皆様、地区の皆様これで“つぐない”が終わったものでは有りません。

この立派な忠魂碑を行政にお願いし、後世に伝え保存してこそ初めて、御英霊に対し“つぐない”が出来るのではないでしょうか。

生かすちから

坪井典男

「母の日」の翌日、夕刊のコラムに、こんな記事が載りました。

「母の日」に、深緑の山寺で法話を聴いた。幼いころ父に連れられて乗ったバスが転落して、母ちゃん、助けて、と叫んでいたではないか。『髪に白いものが交じったお母さんたち。山主の巧みな話術に時を忘れる。』父に何と言われようと、母には十月十日とつきとうか、余分に世話になっているのですからね。」

この世に生を受ける前、母のおなかで育たなかった者はいない。その母もまた、母のおなかで育った。そして、その母も。こうして人間の生命は綿々と続いてきた。まか不思議な因縁である。「いくら考えても分らないことは分らない。この世に生まれて、ありがたい。そう思いましょう。」「お前なんか産まねばよかった。」「だれも産んでと頼んだわけ

じゃない。」そんな親子ののしり合いがいかにも不毛であるか。心に安らぎを得た母たちの顔は平安に見えた。

○

去年は冷害不作。米不足に及んで目の色を変え、米屋の店頭に長蛇の列を作った日本人。今年はどうって変って日照り続き。米に替る食物はあっても、水に代るものは無い。あわてふためいて水容器を買いまくった人達。然し、これらは皆女性であった。私は決して女性を軽視するのではなく、其の偉大なる力に心から敬服しているのである。我々男性より生きる力が数倍も上であるという事実。

七月十六日、厚生省から発表された平均寿命の数値は女性八二・五二歳。悲しくはないけれど男性を六歳も上まわっている。大学を卒業するのは二十二歳。生れて二十四年目である。男子を一とすると女子の持つ実力は六であると言う。厄年の年齢差六歳（男子二十五、女子十九）。四十二歳と三十三歳ではどうかと言うと、その差九歳。両方の数の最大公約数、三と、三を加えると六になる。

六倍の差はまだある。時々テレビで報道される東京や、大阪の失業者たち、家なき人々の姿。画面に放映されるのは総て男ばかり。目を凝らして見ても女性は一人もない。

力の差は歴然。さらにさらに、スペースシャトル、コロンビヤで、果しない宇宙を天女の如く飛び続け、三〇〇キロ上空から、地球の壮大な、神秘なまでの美しさに、“素晴らしい” “夢の様だ” と言い続けた向井千秋さん。総ての分野に高度な技術を熟得し、宇宙での各種実験を見事にこなす力量は並はずれたもの、到底、男性の及びもつかぬ高度なものである。

○

高度工業技術工学、電子工学は、今や我国をして、幕末、明治以来、未層有の経済技術、世界大国として現在に至りました。

平成六年七月現在の日本。心ある人達は、如何にお考えでしょうか。政治、経済、教育、文化。総てに“日本の精神”が置去りにされて、中身はみな空洞、みすばらしき事この上無し。敢て表現するならば、北海道野付半島の“トドワラ、ナラワラ”の如し。

日本列島異常気象の続く中、神道の再活性の可能性を計るべく、前途有為な青年を見出し、将来に向って、的確な判断や決断力、命がけの努力と情熱があつてこそ、初めて現在に生き、日本活性の為に人を動かす力につながるのではないでしょうか。

吾が領主・国司信濃公

河本忠澄

国司信濃公は、幕末藩政時代、長州万倉の領主でありました。文武両道に優れ、又和歌にも大層秀でておられまして、豊臣氏の将、木村重成に例えられる程の人物でありました。

牛ひきて帰る男の子にさそわれて　山田の庵の花をみるかな

此の一首の歌にしても、公の心情がよく察せられます。

又長州藩には、長井雅楽と申す立派な侍が居りまして、朝廷と幕府の関係を心配して、公武一和航海遠略策を考え出し、藩主の毛利公のお褒めにあずかりましたので、色々此の事で東奔西走して居りましたところ、尊皇攘夷派の人々に責められ、遂に切腹となったのであります。その検視役を二十二歳の信濃公が勤められたのであります。

文久三年（一八六三年）二月六日、萩の長井邸に於て、十七人の見守る中、先ず型の如く罪状を読み聞かせがあります。長井雅楽守は「一言申述べるべき事あり、何とぞお許し

を」と申したのですが、副目付役、糸賀は之を許しません。すると正検視役、国司信濃公は静かに自席を立て、おもむろに長井雅楽の側に行き、

「お覚悟の程神妙至極に存じます。此度のお咎^{とがめ}已むを得ぬことながら、誠にお気毒に存じ入る。今、拙者役目を離れて、死に行かれる最後のお耳に、お餞別申すことがござる。

実は貴殿の御災難を、殿様御父子、殊の外、気の毒にお思召され、若様は格別にお心を痛めさせられ、お食事さへも碌々に遊ばされざりし由に承る。攘夷、開国と意見は異なるとも、国を思ふ心はお互に変りござらぬ。貴殿の誠忠は、殿様はじめ藩中、誰一人知らぬ者は無く、世間一同御同情申してをる。ある意味に於ては、殿の御馬前で討死されたるも同様、家門の誉と思召され、御心安く御最期あれ。申すもおろかなれど、人間最期が大切で、名は末代でござれば……」と一語一語力を入れて言い聞かすのでありました。

「そのお詞を承って、拙者、死甲斐を覚え申した。只々恨むらくは、俗論党の掠梨派と氣脈を通じ居るがに疑はれんこと、死出の支^{さわり}でござれば、此の身の潔白を殿様へ御一言御願ひ致しようござる。」と申すのでありました。

信濃公は「委細承知した。殿様御帰館の上は、この信濃より貴殿の御心中、具^{つぎ}さに言上^{ごんじょう}申上げるでござらう。」

長井雅楽守の切腹は実に立派なものでありました。長州藩切腹の手本となったのであります。しかし一年後には、信濃公も又同じ運命に立たされるのであります。

文久三年八月十八日の京都政変で、長州藩兵の宮門出入一切禁止、更に毛利藩主父子の入京拒絶、三条実美以下七人の公卿の都落ちとなったのであります。長州藩は此の処遇に驚き、無実の罪の申開きに、益田、福原、国司三家老と手兵二千をつれて京都進発となったのであります。京都守護職、松平容堂の兵七万、最初は戦うつもりは無かったのですが、合戦となり、長州軍の撃った弾が御所に落ち、国賊の汚名を受ける事となったのであります。惨敗、敗走に敗走。やっと国に帰ったのですが、三家老は幽囚の身となり、幕府は三十六藩に召集をかけ、今、正に長州征伐せんと迫るのであります。長州藩としては単に謝罪する他に途はなく、申付けられし通り、三家老の首級を差出し、又時の参謀四人を斬首し、只管恭順につとめるのであります。

国司信濃公は徳山澄泉寺にて、元治元年（一九六四年）十一月十二日、丑の上刻（午前一時過ぎ）切腹の座につき、「皆々様御苦勞」と挨拶を述べられ、先ず諸肌を脱ぎ、これの下に押し下げ、短刀信国を押し戴き、鞆を抜き放ち、三宝の上の紙にて三回拭い、その紙をもって切先五分余り出して刃を巻き、下腹を撫でおろし、短剣を逆手に持ち、腹一文字

に掻き切り、直に持直して、咽を右より左へと突き通し、左の手を掛けて押切り、バツタリと打臥せらるるや、介錯・国司助次郎一刀のもとに首打落し、立派なる御最期をなさったのであります。時、歳二十三歳五ヶ月。辞世の歌は

よしやよし 世を去るとても わが心 皇国^{みくに}のために 猶つくさばや
でありました。

現在此の地に、「国司信濃幽閉賜剣之地」と一米程の石碑が建てられています。

三家老の死によって長州征伐を受けずにすんだのみならず、王政復古へと進んで行くのであります。

・万倉護国神社宮司 山口県厚狭郡楠町宮尾

英霊の御心に応え奉る

久く野の和かず穂ほ

私はまず皆様方に身近な事から英霊のお話を申し上げます。我々は、いったいどこから生まれて来たのでしょうか。当然、お父さん、お母さんが結ばれて生まれて来たのです。そしてそれぞれの姓と名をいただき、初めて“人”と認められるのです。そして更にさかのぼって、お父さん、お母さんはいうと、それぞれのお父さん、お母さんから生まれて来たのです。この生命の連続性によって、我々は今、存在しています。その我々より以前の御存在を“御先祖様”あるいは、“御祖先様”と称しています。また将来について言えば、私のような一人者であっても、いつかは配偶者を得て結婚するでしょう。そして子供が生まれ、更にその子供がいつか結婚し、その生命のくりかえしが行われ、我々の先の存在を“子孫”と称しています。我々は、この生命のくりかえし、そしてその連綿性を、日本人は特に尊んできました。そのよい例が“お盆”であります。お盆になると、故郷に帰省し、

御先祖様のお墓まいりをして、現在と将来にわたる御加護をお祈りします。子孫の繁栄を祈念するわけです。そして我々は、御先祖様に、立派に家を守っていきます。どうぞ御安心下さいとお誓い申し上げるのです。我々が御先祖様をうやまうのは、至極当然の事です。その御先祖の中には、避けるように思っても避けることの出来なかった戦いでなくなられた方々、二、四六六、二七一柱の戦歿者がおられます。これら戦歿英霊は、寝起きを共にし、共に生活したお父さんやお兄さん、あるいは息子さんなどの肉親であったり、恩師や先輩、同僚、あるいは友人、後輩、あるいは愛する恋人であったりとさまざまです。

しかし、これら日本人の御祖先であられる戦歿者が、侵略者扱いされたり、犯罪者呼ばわりされる事は、断じて許されないことです。死して尚、英霊は鞭打たれる思いと存じます。

また我々が、生まれ出たこの日本の国の、この平和を享受している事を忘れてはいないでしょうか。私達が、こうしてあたり前の様に暮しているこの美しい国土日本を、生命をかけてお護り下さったのが、まさしく靖國の英霊に他なりません。もし、大東亜戦争で英霊が敢然と立ち上がり、祖國日本を御守護下さらなければ、今頃、戦前の東アジア諸国のように、西欧列強の植民地となり、アメリカ・ソ連・イギリス・フランス・オランダ等に

分割統治されていたかもしれません。ですから我々は、今一度、掛けがえのない生命に替えて、祖國日本をお護り下さった殉國の英霊に感謝の誠を捧げると共に、英霊等の御遺志を確と承け継いで行かねばならないと存じます。終戦五十周年を迎えようという重大時期に、平成五年八月、細川元首相は、「先の戦争は間違つた戦争であり、侵略戦争だった」と暴言をはきました。まことに憤ろしい事であります。更に、次の羽田前首相は、関係各国に対する「反省と謝罪」を表明する国会決議を行おうとしておりましたが、幸い両内閣とも、いずれも短命に終わった事は喜ばしい限りであります。

しかし、終戦五十周年が近づくにつれ、悲しくも同胞の中に、我が国の戦争責任を追求する動きが益々加速され、憂慮にたえない事態であります。私が心配しているのは、あの「教育勅語」の二の舞にだけはしたくない。

と申しますのは、昭和二十三年六月十九日、依然米軍の占領下にあった日本国会の衆議院で、「教育勅語等排除に関する決議案」が採択され、同日参議院でも、「教育勅語等失効確認に関する決議案」が可決された。この法案は、何等の予告も行われず、緊急動議として提案がなされ、議案審議に入り、誰一人の発言者もなく、すぐに可決された経緯であるからです。教育勅語には、「父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信シ、恭儉己レ

ヲ持シ、博愛衆ニ及ホシ、学ヲ修メ、業ヲ習ヒ、以テ知能ヲ啓発シ、徳器ヲ成就シ、進テ公益ヲ広メ、世務ヲ開キ、常ニ国憲ヲ重シ、国法ニ遵ヒ、一旦緩急アレハ、義勇公ニ奉シ、以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と十二の徳目が示されています。この徳目の実践者こそ、まさに殉國の英霊ではないかと拝察する次第であります。

靖國神社拜殿前の揭示板には、いつも御祭神の御遺書が掲げられています。その前では、中学生や高校生が立ち止まり、真剣なまなざしでその御遺書に見入っています。神社では、月ごとに御遺書を取り替えています。そのどれもこれもが若者の胸を打ち、大きな感動を与えています。是非お手元にお配りしました御遺書を御覧いただきたい。その六行目の「コノ世ニ生ヲ享ケテヨリ今日迄、何一ツ御父母様ニ対シ孝養モ出来ズシテ果ツルハ不孝ナレドモ、國家興廃ノ時、君ノ為、空ノ魂魄ト化スル事ニ依ッテ、不孝ノ罪ヲオ許シ下サレ度候」。何という切々たる思いであります。まさに死を前にして英霊が、切っても切れない思いで、後に残るお父さん、お母さんに、妹に弟に、それぞれ書き認めた御遺書の数々に他なりません。教育勅語がない今、これら英霊の御遺書こそが、教育の指針であり、教育のバイブルになり得ると確信致します。

どうか、東京裁判史観に呪縛された政治家やマスコミ、更には学校の先生に耳をかす事

なく、戦のない安らかな日本、平和な世界を切に願って散華せられた御祖先である、殉國の英靈達の叫びをお聴きいただき、道義国家の建設に邁進しようではありませんか。この事こそが、“英靈の御心に応え奉る”事になるのですから。

遺書

海軍飛行兵曹長 二見 光雄 命

昭和十九年十月十日

沖縄方面にて戦死

宮崎県出身 二十二歳

謹書 戦地勤務ニ当リ一筆書残シ候

東亞ノ平和ト人類十二億ノ福祉ヲ確立センガ為、笑ッテ死ス。男ト生レ、而モ帝國海軍搭乗員トシテ戦場ノ空ニ散ル、日本男児ノ本懐之ニ過グルモノアラシヤ。コノ世ニ生ヲ享ケテヨリ今日迄、何一ツ御父母様ニ対シ孝養モ出来ズシテ果ツルハ不孝ナレドモ、國家興廃ノ時、君ノ為、空ノ魂魄ト化スル事ニ依ッテ、不孝ノ罪ヲオ許シ下サレ度候。

戦死トワカラバ、笑ッテ万歳ヲ唱エ下サレ度候。特ニ母上様ニハ、銃後ヲ守ル

強イ母トシテ、決シテオ嘆キ下サリマスナ。世ニハ三人ノ子ヲモ捧ゲタ母アルヲ
オ考エ下サレ度候。殊ニ我三男ナルハ何ヨリト存ジ候。

我無キアトモ、郷土ヨリ空ノ戦士ノ出デン事ヲ祈リ居リ候。未ダ後輩ニハ晴ノ
舞台ガ、墳墓ガ太平洋上ニ残サレオルト信ジ候。

今後必ズ、先輩、同輩、後輩ノ力ニ依リ、新シキ世界ノ曙ノ来ルヲ確信致シ居
候。

最後ニ御両親様ノ御健康ヲ心カラ祈リ申シ候。

兄上様、姉上様、叔母様ノ生涯ニ幸アレカシ。

(靖國神社社務所
平成六年七月社頭揭示)

・靖國神社権禰宜 東京都千代田区九段北三一―一

靖國に思う

池田陽一

皆さんは「義烈空挺隊」をご存知でしょうか。忠義の「義」、壮烈の「烈」、空中挺身（進）の「空挺」と書きますが、昭和二十年五月二十四日、沖繩戦たけなわの中、沖繩の北（読谷）飛行場に九七式重爆撃機をもって強行着陸し、所在の米軍を大混乱に陥らしめた陸軍の部隊です。

この話題を選びましたのは、ひとつは当然のことながら、護国の英霊を安んじ奉る靖國神社の御垣の内での研修であるということ。二点めは私の誕生日が六月二十三日、即ち「沖繩慰霊の日」であるということ。そしてもう一点、指揮官の奥山道郎大尉（のち戦死後大佐）は三重県津の人、つまり郷土の生んだ英傑である、ということです。

「空挺部隊」と申しますと、「藍より青き大空に大空に」と、歌い、親しまれた海軍の落下傘部隊や陸軍挺進団の例を引く迄もなく、各国とも精鋭をもって鳴る部隊で、謂わば敵

の意表を衝いて「神出鬼没」。しかし、「この青空も敵の空、この山川も敵の陣」との歌詞の通り、遠く敵地に、しかも基本的に軽装備で戦わざるを得ないため、投入地点、投入時期を過^{あや}てば、敵地の中に在^あって活路を失うという決死の部隊であります。

この「義烈空挺隊」は、昭和十九年十二月八日、奇しくも大詔奉戴日に溯^{もと}って編成され、本来、サイパン島のB29基地攻撃を目的としておりました。その後、戦局の推移による再三の目標変更と、その都度の失意と挫折の中で、実に半年の間、文字通りの決死隊、固^もより生還を望めぬ出撃の日を待ち、今日か明日かと日々死と相対し続けたのです。「半年」、これ程長い時間、決死の待機の立場に身を置いた部隊は稀でありましょう。

奥山隊長は、幼年学校以来、軍学校を進んだ生粋の陸軍武人ですが、武一辺の人ではなく花も実もある武人でありました。たとえば、訓練に際して配給された落下傘に記されている番号が、不吉な四番だからと交換を申し出た兵があつたそうです。受領品を私情により交換するなど出来ることはありません。当然、担当の下士官の顔はたちまちにして怒気をはらんだそのとき、奥山隊長が横から現れ、「この番号は俺の落下傘だ、人に使わせるな」と言つて持つていった、そんな話が伝わっております。このように機智巧みな指揮官でありましたから、隊長を中心に隊員総勢百三十六名、一糸乱れぬ軍規を維持し、

黙々と訓練に励んだとのこと。

さて、いよいよ出撃の日、全身攻撃用武器を纏った隊員は十二機の爆撃機に分乗。沖縄までの行程の長時間、狭い機内で隊員は中腰の姿勢であったということです。

途中、故障などで四機が引き返したものの、八機が沖縄に到達。米軍の記録によれば、「少数の勇敢な者が、どの程度のことをなし得るかを彼らは示した」との前置きをした上で、一機が強行着陸に成功したことを認め、降り立った十二名の隊員によって、飛行機三十機以上の破壊・損傷、米兵殺傷二十余名、ガソリン七万ガロン炎上と、三日間にわたり同飛行場を使用不能ならしめたのであります。また、彼らの勇戦奮闘によって生じた混乱に乗じ、七十余機の陸軍特攻機が沖縄に殺到。二十四機突入、十三隻の艦船に損害を与えたのであります。

私は、所謂「戦争を知らない子供たち」、実体験を持ちません。しかし擬似体験により「見てきたようなホント」を語るのは可能です。いま、「義烈空挺隊」の任務は陸自習志野第一空挺団が引き継いでいます。この後、私共戦後育ちの者、また子孫に戦争の実体験の機会のあることは、間違っても願うことはありません。従って、後のちの代に、擬似体験ではありますが、英霊の遺徳を語り継いで行きたいと存じます。

御霊を慰め奉ること、国安かれとのご遺芳の随々に平和を祈念すること、そしてご遺徳の「語り部」たることを、いまここに誓うものです。

・椿大神社権禰宜 三重県鈴鹿市山本町一八七一

敬・愛

野の
村むら
好よ
史ふみ

先日ある雑誌を読んでおりましたら、立川談志と編集長とのインタビューの記事が載っておりました。

編集長 先日、久しぶりに新宿の末広亭へ行ったら、前の客が居眠りしていました。

談志 有名な話があつてネ、寝かしちやいけねえと思うから大きな声で講釈やつてると、「ウルセツ、寝らんねえじゃねえか」って。まったくその通りで、寝られる

ような芸をやんなきゃいけません。寝ているのが非常識じゃない。むしろ寝かさない芸をやってるほうがいけない。セコイ芸は寝てらんないです。

というものでして、私は「さすが咄家だな」と思いました。芸がお客に気持ち良く、正に赤子への子守歌の如くに受け入れられなければ、本物の芸ではないし、本当の咄家では無いということだと思うのですが、今日はたった十分ですが皆さんに快く寝てもらえるように頑張りたいと思います。今回は『敬・愛』という演題をひっ提げてやって参りました。十分という短い時間ではございますが、皆さんに気持ちよくお休み戴きまして、辛辣なる御批評を賜りますよう、お願い申し上げます。

私は、五年前位から陽明学者と言われる安岡正篤先生のファンになりました、先生の著書を集めるのが趣味のようになりまして、安岡正篤と書いてある本は片っ端から集め、暇があると開いているのですが、ある時、先生の『運命を開く』という著書を読んでいたのです。その著書の中に「親と師は何をすべきか」という節があったのです。その中に、人間である限り、いかに幼稚であっても、むしろ幼少であればあるほど純粋に、愛を要求すると同時に「敬」を欲する。敬を充たさんとする心がある。子供は、いかにいといけなくとも、すでに三歳になれば、愛の対象、まず母の愛を欲する。可愛がりたい、愛

されたいという本能的要求と同時に、敬する対象を持ちたい。畏敬するという自覚はありませんが、本能的要求です。敬する対象を持ち、その対象から自分が認められる、励まされるまた励まされたい、という要求を持つておる。この愛と敬とが相俟って初めて人格というものが出来てゆく。その愛の対象を母に求め、敬の対象を父に求める。父のいない場合には、その二つが皆、母に集まるわけであります。だから母は非常に難しいことになる。もちろん、それだからといって、一方は敬だけで、一方は愛だけでというような、そういう区別はありません。いずれも、それぞれ含まれておるのですが、それを特に分けると父に敬を求め、母に愛を求める。言い換えれば、母は、よほど悪い母でない限りは問題ありませんが、父は、よほど心がけねば、つまり、そのいとけない子供が理屈なしにおのずから尊敬し、その父から認められ、励まされるような、つまり子供心に何となく偉い父がほしい。父は暗黙のうちに、無言のうちに、子供の尊敬信頼の対象になるような父でなければならぬのです。やさしい母が必要と同時に、子供からいうならば、何となく頼もしい、何となく敬慕される父が必要なのであります。

ところが、不幸にして世の父親族というものは、家庭を誤解して、自分たちは外に出て終日働いて疲れて帰ってくる、家庭で休むのである。家庭というところは、「安息所」であ

る。苦勞な世間から開放されて、ここでは、やれやれと少々の自儘・氣儘も許してもらう所と考えている。くだらぬ遊びで夜ふかしをする、朝寝はする、酒を飲んで怠けたり、怒鳴り散らしたり、ろくなことを子供に見せない。子供からいうと、もっと偉くあってほしい。まだ幼稚ですから、理性的に何も理屈っぽくは考えませんが、本能的に失望する。これがいけないのです。というものです。

また『父親はどうあるべきか』という節では、言葉とか鞭で子供に対して要求したり説教したりする前に、父自身が子供から「敬」の対象たるにふさわしい存在たることが肝腎です。父の存在そのものが、子供に本能的に敬意を抱かしめる。彼の「敬」の本能を満足させる存在であること、——それが父たるもののオーソリティーである。だから父の存在——父の言動そのものが子供を、知らず知らずのうちに教化する。やさしく言えば、父の存在・父の姿・父の行動が、子供をして本能的に真似させられるものでなければならぬ。というものです。

私は、この本を読み進むにつれ、ドキッ！とさせられ、非常に反省させられたわけがあります。

私は、七年前から琴崎保育園をお借り致しまして少林寺拳法の道場を開いておるのであ

ります。現在小学一年生から一般社会人まで六十八名の門下生を有し、青少年育成の一端を担うべく、日夜修行に励んでおるのでありますが、この安岡先生の本を読んでは、人様の子供の教育のお手伝いをする以前に、自分の子供の教育が出来ていない。出来ていないというより、していなかったことに気が付いたのです。それから自分自身出来る限り先生が言われておりますように、子供たちより早起きするようにして、子供たちの前に醜態を晒さないように気を付けておるのであります。そのせいかどうかは、わかりませんが、最近何となく息子が変わって来たような気がするのであります。

と申しますのも、手前味噌になりそうですが、私には子供が三人いまして真中が男の子で長男で、小学三年生なのです。その長男が大変どんかんで、また勉強もあまりできなくて家内の悩みの種なのです。少林寺拳法は、小学校入学と同時に、私は入門しろ、入門しろと勧めておったのですが、絶対やりたくないと言子言っておったのであります。しかし何を思ったか三年生になったとたん、「父ちゃん、ぼく少林寺拳法やる」と言い出しまして、今は小学一年生の次女と一緒に少林寺拳法をやっているのであります。ある時、長男の父兄会がありまして、家内が行ったのです。そして家内が帰って、いきなり「お父さんお父さん、学校でね。先生が大きくなったなら何になりたいかを書かせたんで。崇臣は何ん

て書いたと思う。」私は息子に、いつもパイロットになって父さんを色々な国に連れて言ってくれと言っておりましたので、「パイロットじゃろう。」と言ったら。「ちがうんよ。少林寺の先生になりたいて、書きちよったんよ」と言ったんです。「何！ 崇臣が少林寺の先生になりたいって！」私は、思わずほくそ笑んだんです。

またある時、今度は長女が「父さん、父さん、崇臣がね、クラスの代表委員をやっちゃうよ。」と私に言ったんです。代表委員と言ったら、昔で言う学級委員長なのですが、それをどんかんで勉強嫌いな息子がやっているとやうんです。私は耳を疑いました。そして私は息子に聞いたんです。「おまえ代表委員をやっちゃうるんての。」息子は平然と「うん！

やっちゃうるよ。」と言うんです。私は「どうしてなったんだ。」と聞いたたら、「誰もやる人がおらんで、先生が誰かやってくれる人はおらんかねって言うたけー、ぼくがやっちゃるちゆうて手を挙げたんよ。」と言ったんです。私は、どうせ息子がどんかんを張るから、先生が代表委員でもさせたら少しくらいよくなるだろうと考えて、させたのだろうとぐらいにしか思っていなかったの、自分が立候補してやったと聞いたときは、「おっ！ 息子もなかなかやるじゃーないか」と、少々見直して「おまえもなかなかやるじゃーないか、しっかり頑張れよ！」と誉めてやったんです。

それから、またある時、息子が突然私に「父ちゃん、ぼく神主になってもええよ。」と言っています。私は、一度も息子に神主になれなど言ったことはありません。そこで私は「おまえ、父ちゃんの後継いで神主やるんか。」と聞き返したら、「うん、やってもええよ。」と言っています。それで私は、「おお！ 息子も儂を敬の対象として見始めたか、儂も息子から敬の対象として見られるようになったか。」とまたまた一人でほくそ笑んだのです。それ確かめようと思って、「おまえなんで神主になってもええと思ったんか。」と息子に聞いたのです。そしたら息子は「神主になったら、魚釣りに行けるんじやろ。ぼく、魚釣りが大好きじゃけ神主になるんよ。」と言ったのです。私は思わず、ガクッ！ ときまして「これじゃまだまだいかなー」と思いまして、再度自分自身を反省し、本当に子供にとって敬の対象たる父親になるよう、努力しなければいけないと思った訳であります。

老荘系の『淮南子（えなんじ）』と言う書物の中に「行年五十にして四十九年の非を知り、六十にして六十化する」というのがあります。私も常に自分自身を反省し、常に変化し子供にとって敬するに値する人間になろうと思っておる次第であります。どうか皆様方も今一度、自分自身を振り返り、反省をし、敬虔な心を回復し、常に変化し、同じ子を持つ親として、子供たちに本物の「敬・愛」を涵養し次代を担う子供たちを立派に育てようで

はありませんか。

・ 琴崎八幡宮権禰宜 山口県宇部市維新山

神のみ心のままに

綾あや川かわ憲のり子こ

「敢えて主とならず、客となる」

宮司を務めておりました主人が神様のみ元へ参りましてからは、冒頭のこの老子の言葉の様に生きて行こうと、思っております、不肖の私が、めぐり合せのままだに、この立場に立っておりますが、思い返してみますと、諸々の事が、起きました時々、自分では、こうしようと思いましたが、なかなか自分の思う様にはならず、最後には、かならず、ご神前へ参りまして、これこれこうだと奉告をいたしまして、神様のみ心のままにと、お願いを申し上げ、今日に至っております。又日々のご奉仕申し上げますご祈願等におきまし

ても、いくら願主の願いを一生懸命に中取り持ちとしてご奉奏申し上げましても、神様の
み心にならず、願主の願い通りにならない事が、多々ありますようで、私はいつも「人
事を、尽して、天命を待つ」という事を申し上げ、「皆様のお力で出来ます事は、すべて真
心を持って行い、御祈願をなされたのですから、後は神様のみにおまかせいたしまし
う。もし自分の思う様に、ならなかった場合には、自分の努力がもう少し足らなかったか、
神様が、この人はこの道に進んだ方が、又未だ時機尚早ではないかと、お教え下さってい
るのかもしれませんが」と申し上げ、そして「どうぞ皆様のお心が清々しくあります様に」
と申し上げさせていただいております。

さて讃岐という所は、昔から雨が少なく、ため池の多い所ですが、奉仕しております当
天満宮のご祭神であらせられます菅原道真公が、国司を勤められた折、大旱ばつがあり、
道真公が臣下と共に七日七夜、山に籠りまして、雨乞祈願をいたされました所、三日三晩
雨が降り、それを喜んだ郷人等が、元道真公の官舎のありました今の（この）天満宮のお
祀りしています所へ集まり、報恩感謝の踊りをしました。その踊りに、後に法然上人が振
り付けをしましたものですから、神社で念仏踊りと思われるかも知れませんが、滝宮念仏
踊りとなり、それ以来千有余年の時の流れを経て、現在も氏子はもとより、近郷近在の、

郷より奉納され、国の無形文化財としてお祭りが斎行されております。

その祈願の折の祭文に

「八十九郷、二十万人の郷人の愁をなくす為に雨を降らせてくれれば、盛大にお祭りをするが、もしこの願いが入られず、雨を降らせてくれないのなら、郷人の恨みは高まり、祭礼もおろそかになるでしょう。そのへんの所を、十分お考え願いたい」という様な祭文が残っております。神様もさぞ、おどろかれた事と思います。それ以来千年余り毎年、報恩感謝の念仏踊りが、奉納されております。それでも十年に一度位の割合で、早ばつの為の雨乞念仏踊りが行なわれて来ましたが、昨年の様に雨が降り続きますと「永雨に念仏踊り」などと新聞の見出しに書かれたりしました。今年は雨が少なく、大変な水不足となり「いつ雨乞念仏踊りをしてくれるのですか」と催促をされています。昭和四十八年の大旱ばつの際には、関係者一同三日三晩参籠しまして、煮たきものもすべて男子の手で行なわれ、むろん関係者一同は、禊、潔斎をしまして祈願を共にいたしました、雨乞念仏踊りをしましたが、その折の崇敬者、祈願者の心情は、本当に真心のこもった真剣そのものでしたことを思い出します。翌年には、香川用水ができて、もう水の心配はないと、安心しておりましたが、昭和五十七年にも早ばつとなり、雨乞祈願念仏踊りを奉仕しました。

その折は一晩だけの、潔斎だったと記憶しております。いつの時代でもそうですが、「のどもと過ぎれば、何とかで」自然の恵みと祖先の恩に感謝を忘れました私達人間に対する、昨年の米不足、そして今年の水不足は、神様のみ心よりのおさとしてはいいかと思ひます。そして又

現代の国の礎を固め、国の発展と国の民の幸せと、平和を信じて散華せられました靖國のご英靈への報恩感謝の日は、早、戦後五十年という節目になろうとしています。この時に、現在の人々は、飽食と我がままと、私利私欲に満ち溢れ、政治は混沌をなし、混沌の現世はいかにかと思ひます。「衣食住足りて、礼節を知る」。この神様のみ心になう心が欲しいものです。そして実践をなすべきではないかと思ひます。どうか皆様が健康で平穩な日々が過せます様お祈り申し上げます。

最後に、私事ではありますが、この七月十三日は御英靈となつております義父の五十年祭を斎行致しました。ご縁がありまして義父のみたまの鎮まります靖國神社の月例ツキイミのお祭りに、母よりの玉串料とお供物を捧げ参拝させて頂き、御英靈の方々に報恩感謝と、国の行末をお守り下さいと、私なりにご祈願させて頂いたございました事を心よりお礼申し上げます。

大東亜戦争の真の意義——亡き戦友に捧げる——

藤田長政

今日ここにおいでの方諸先生の中には、先の大東亜戦争に参加せられました方は、おありでございましょうか。

その方々は外国を侵略しようと思って出征せられましたのでしょうか。

そんなお方は私を含めまして誰一人ありません。

私達は唯只管に陛下の大御心を奉戴して、国家の安全と東洋の平和の為に銃を執って勇躍戦地に赴いたのであります。

つまり侵略の意図は全然なかったのです。

この大東亜戦争の真の意義を親から子へ、子から孫へと子々孫々に言い継ぎ、語り継ぎ伝えて行かなければ、未来永劫に大東亜戦争の真の意義は日本歴史の中から消えて行くのであります。

世界史の中では間違つて伝えられて行くのであります。

実際に銃を持って弾丸の下をくぐつて来た者が、侵略の意図が全然ありませんでしたのに、戦争に行かなかった者が、侵略だとか何だとか言うのは全く筋違いであります。

翻つて世界史を見ますとき、十八世紀から十九世紀頃の西洋諸国は、先を争つて東洋へ攻めて来たのであります。

アヘン戦争以後の我が国は、東はアメリカ、北はロシア、西はイギリス、フランス等と四方から攻めたてられたのであります。

明治二十四年ロシアの皇太子ニコライ二世は、長崎鹿児島を経て五月九日京都へ入り、翌々十一日琵琶湖を視察に滋賀県を訪れたのであります。

その時ロシアの皇太子は、「この琵琶湖は大へん景色が良いので、日本を占領したらここを公園にするのがよい」と占領後の計画を語っていたのであります。

それを聞きつけた護衛の警官津田三蔵は直ちに抜劔して「何を……」とロシアの皇太子めがけて切りつけたのであります。

これが世に言う大津事件であります。

東洋の大部分の国々は、次々に西洋諸国の言いなりになって、その属領となつて行つた

のでありますが、唯一つ日本だけはそうは行かなかったのであります。

若しも日本が東洋の他の国々と同じ様に、西洋諸国の言いなりになってその属領となっていたならば、今頃は日本の国はどうなっていたでありませんか。

我が国は一億国民が一致団結して「何くそ……」とはね返したのであります。

之、即ち大東亜戦争であります。

戦況必ずしも我に利あらず。

然れどもこの大東亜戦争は、世界史の上で大きな意義を持っているのであります。

西洋諸国の言いなりになって、その植民地になっていた国々も、大東亜戦争の結果次から次へと独立していったのであります。

それを思いこれを思いますとき、先の大東亜戦争でお亡くなりになりました御英霊の方々の御功績は、何と大きなものでございませんでしょうか。

単に日本の国をお守り下さいましたのみならず、広く東洋全体を西洋の魔の手からお守り下さったのであります。

私達は何と言って御英霊の方々に御礼とお詫びを申し上げたらよろしいか、その言葉がございせん。

私も戦地で沢山の戦友を失ってまいりました。

私だけが唯一人生に残って内地の土を踏む時、とめどなく涙が溢れて来て、どうしようもありませんでした。

「ああ申訳ございません。」

「お許し下さい。／＼。」の連続でした。

おそるおそる我が家の敷居を跨ぐ時、「ハアッ……」とくずおれる様に倒れてしまいました。

来る夜も来る夜も戦友の夢を見ました。

「ドカッ……」と背中をどやされて「藤田どうした」……ハッと目が覚めることが幾度あったか知れません。

終戦以来茲に五十年、この様に立派に我が國が榮えて来ましたのは、一にも二にも、これ偏に大東亜戦争でお亡くなりになりました御英霊の方々のお蔭であります。

幾百万の御英霊の方々が、天翔り国翔りお守り下さいますことによりまして、我が國は今後益々立派に榮えて行くことは絶対にお間違いございません。

見よ東海の空あけて

旭日高く輝けば

天地の生氣潑刺と

希望は躍る大八洲

御清聴ありがとうございます。

・海津天神社名誉宮司 滋賀県高島郡マキノ町大字海津一二五三

藤谷君会いに來たぜ靖國へ

金丸光作

昭和五十六年八月、氣にかかっていた藤谷五郎二等兵の其の後の安否を、記憶のままに高知県幡多郡大正町役場へお尋ねした。神のお引き合わせとは正にこのこと、不思議に藤

谷恭子さんと言う甥の嫁さんが、役場奉職中で、幸い連絡が取れ、昭和十九年六月十八日戦死との事が判明。まさかと思ひ、ただ、ぼう然とするのでした。直に意を決し、「お彼岸にあわせて九月二十三日に墓参なりとさせて戴きます。道不案内の為、高知市よりの道順を御教之下さい。」と御遺族藤谷明氏に連絡をしました。当日示された略図を頼りに「二八〇K」の行程を早朝出発、自ら車を運転して、片道五時間を要し、正午前に出迎えられて、故藤谷君の霊前に通された。三十八年目に深々と頷ぎ、持参せし心ばかりの供物を捧げ、慰霊の詞を奏した。

然し感情ばかりが先に立ち、文章にならないのがもどかしい。「此の霊床に斎い鎮ります、故藤谷五郎の命の霊前に謹しみて申し上げます。昭和十八年七月、赤道直下、炎熱焼くが如き椰子の葉蔭にのみ憩を求むる南海の果、ニューブリテン島ラバウルの地に、猛部隊の戦士として日夜を分たず、戦務に励み努めて、朝起きてより寝むる時も離れる事無く、共に手を取り、時には故郷を語らい慰め合ったが、昼となく夜となく、襲い来る空襲に悩まれ、防空壕に駆け込みしも幾度か、分けて吞みし加給品の美味酒に酔いしれ、購い求めた煙草の消えぬ思にふけりしものかは、眉毛の太く濃き面影が、心の胸奥にひそみて、懐しき思出の数々は去り難く、心ならずも軍の命により、君等と別れて、先のニューギニヤ

作戰の傷病兵と戦死者の御遺骨移送の任を受け、朝鮮の平壤に転進せしめられたのです。再度ラバウルへ帰任せんと思おしも、昭和十八年十一月既に南海の太平洋上は、海上、制空権もむなしく、戦況かんばしからず、別れし儘に、悲しくも、耐え難きを耐え、忍び難きを忍べと、大君の詔勅宣せられ、大東亜の聖戦も遂に矛を収めてより、既に三十八年の年月を過ぎた。此の間国内は地獄のさまにて、国民ひとしく生活に悩まされ、職を求めて、努め尽くしかば、其の状態は戦場をしのぐ程にて存りしが、遂に必死の努力は、むくわれて今や世界に君臨する経済大国となった。これ皆諸英霊の加護の外なし。ここにおいて戦友の安否を気づかう心の余裕を取戻し、我もまた、戦友藤谷五郎君が高知県幡多の大正とのみ聞き居りたり。戦後生きながらえて、京阪神にて活躍ありなんと、さがし求めたるに、悲しとも悲し運命の定か。人に倍する勇敢にして素早かりし君も、南海の果に護国の鬼と、我が日本国存立の人柱に立たられしかと。遺族の便りに涙の滴り如何とも成し難く、生きていれば戦の苦楽の思出等語り合いたいものをと、現実とは申し乍ら、ああ藤谷五郎君、今や君の姿まみゆあたわず、藤谷家の墓所に鎮り給うと承り、無念さ増すばかり。最早戦後三十六年を経たり、誠に、花も実も在る男盛りを、年老いた親、愛しき兄弟をも打捨て、国恋い燃えて、生命果てられた其の功績は高く、阿波より道をたづねあぐねて訪れ

来たり、心ばかりの誠心捧げ、御霊慰めの言葉を申し上げますれば、安らかに、聞食して、天の安の河原の水際に心をやり、風の誘わぬ花を眺め、天翔り国翔り、御国の弥栄を始め、御遺族方々を守り、藤谷家の墓所深く安らかに鎮り座せと謹しんで言上します。時に、昭和五十六年九月二十三日金丸光作」と奏上し、深々と涙と共に頭をたれて帰宅しました。二百八十kmを走車して帰宅後気付いたのは、車の免許証の日付が一ヶ月前に申請を忘れて、知らぬ事とは申せ、一途に藤谷君の事のみ眼中に在り、無免許で高知市街を抜けて、好くぞ走れたものか。戦友藤谷君の加護によるものと言う外なし。ようし次は東京の靖國神社へ会いに行くぞ、と決意しながら早や十三年が立ちました。神道講演研究会のお蔭で、寝ても起きても脳裏をかすめた靖國の社頭へ、然も二泊三日間、故藤谷君等及び先輩の霊床の端にはべらして戴き、朝夕拝さして戴ける感激!! 静かに目をつむり合掌すれば、神殿の奥より藤谷君の特長ある声が……「班長殿」「鯉が群れて来ます。手榴弾を一発下さい」「自給自足の鯉で一杯やるか!!」「ハーイー」まゆげの濃い藤谷君の顔が、ニコニコとして近寄って来る。此の状態を故郷の御遺族にお伝するよ!! ちょうど今日は平成六年七月二十一日、靖國神社の「月次祭」の当日。経済成長に酔いしれ、民主主義のはけ違い、言論の自由の考え違い、感謝と責任と義務をおろそかにする。日本国を宰領する総

理大臣にしても、国会議長にしても、文化人の中にも、教育の現場に務むる一部の人に然り、マスコミ然り、我が国の聖戦により「亜細亜」の植民地より独立せしめた功績を讃えず、大東亜戦を侵略とうそぶき、果は陳謝外交に至っては、多くの靖國神社に奉斎されている諸英霊を冒瀆する。我が日本國體を護持する、氏神様に奉仕する同志に加わり、痛む足を杖にすぎり、口の動ける限りと大和心の蘇^{よみが}えりに努むる先輩にすぎりて、全日本神道講演研究会東京大会の一員としてまかり出たる心は貴き英霊を、むだ死さすまじと同志共々、心を磨き、身を淨^{きよ}め、伏して英霊を讃えん。戦後正に五十年、我等生き残りの戦友、全国に号して、靖國奉賛に挺せんことを期す。願わくば藤谷五郎の命外^{あまた}数多の諸英霊の安らかならん事と、真の世の平らぎをのみ祈りて終りとします。

・ 足代八幡神社宮司 徳島県三好町大字足代二二九

大東亜の防人―文弱日本―

波多野 はたの

學 まなぶ

吉田松陰先生『留魂録』佐久良東雄先生『遺書』にも論されました。

口さきだけの文を連ね論を説く、一旦緩急あれば言を投げうち、『武』をもって御国のために生命を賭す気慨のない、腑ぬけのことを文弱と言います。戦後日本人の魂は地に堕ちてしまいました。

国を背負う、責任ある立場の総理の口から、厳然とした歴史の事実を顧りみることなく、恥とも思わず、「侵略」と言う言葉が飛び出しました。こんな御為^{おため}転^{ごかし}は許されません。

近世以来、欧米列国は先を争ってアジアにアフリカに植民地を求めました。白人の有色人種への奴隷化の歴史事実であります。これを「侵略」と言うのです。亜細亜民族の生き残りを賭けて、やむにやまれず立ちあがった大東亜の戦いを、蔑^{ないがしろ}にしてはなりません。

御国のために、亜細亜解放独立のために散華された靖國神社の御英霊に申しひらきがで

きるでしようか。「耐へガタキを耐へ忍ビガタキヲ忍ビ、萬世ノ為ニ泰平ヲ開」かれた陛下に、何とお詫びできるでしようか。日本三千年の歴史を何と考へているのか腹立たしい限りです。

日本の歴史を顧りみます時、何度か大きな民族危機がおとずれています。一つは唐の時代、一つは元寇の役、今一つは明治開国以来大東亜の戦いでありまゝ。その中でも大東亜の戦いは民族始つて以来、未曾有の危機でありました。戦いに敗れましたが、陛下の御聖断と、かけがえのない尊い命を捧げられた二百五十万の御英霊により、国は護られ、民族の危機を免まぬがれることができました。それだけではありません。この尊い犠牲があつたればこそアジアの国々、アフリカの国々の独立が果されたのです。

民族の独立を勝ち得た戦い、これを聖戦と言わずに何とよぶのでしようか。

今を去る千三百年。唐の勢力増大による百済滅亡。百済支援の日本の危機は急を告げ、日本は本土決戦に備えました。『防人』であります。

『万葉集』「筑紫に遣はさるる諸国の防人の歌」

庭中の阿須波の神に木柴こしばさし、吾あれは齋いははむ帰り来くまでに

霰降あられふり鹿島の神を祈りつつ、皇吾軍すめらみくさにわれは来きにしを

大東亜の戦いに征でむかれた軍人も、武運長久を願ひ、武の神・産土神に祈りを捧げられました。

防人に征くは誰が背と問ふ人を、見るが羨しき物思ひもせず

東国より九州へ、村の者みなが今上の別れと見送る歌です。雄々しい姿の影にいつ夫に令状が、というせつない思いが心によぎります。大東亜の戦いに国旗をうち振り、お見送りの出征軍人の姿が浮びます。

父母が頭かき撫で辛くあれて、言ひし言葉ぜ忘れかねつる

大君の命かしこみ磯にふり、海原渡る父母を置きて

あとに残る、年老いた家を守る父母に後髪をひかれます。親も子も心を残してのいたたまれないものがあります。

芦垣の隈処に立ちて吾妹子が、袖もしほほに泣きしぞ思はゆ

いとい妻や子たちの、人目をはばかって物かげで歎き悲しむ別れの姿に涙せずにはおれません。

今日よりは顧りみなくて大君の、しこの御楯と征で立つ吾は
いろいろな懐いが脳裏をかけ巡ります。だがそんな私ごととは言っておれません。天皇

様の御國、この日本を命にかえても守り通そうとする力強い氣持が痛いほど伝わってきます。

事跡を羅列することが歴史ではありません。人の心の吐露、情の通う歌にこそ現実の歴史があるのです。(註)

日本は神ながら陛下とともに悠久の歴史をきずき栄えてきた、ゆるぎない民族です。世界に比類なき日本を護るため、たった一つしかない尊い命を捧げる覚悟の歌です。

石井寿夫先生の言葉を借りるならば、小さな個人の一つの命より、子々孫々のため、民族の命・国の命を護らねばならない時があるのです。これが文弱に対する『武』の精神なのです。

大東亜の戦いで出征された方々の御遺墨を拝観いたします時、湧れ出る国思う恋闕の心が、この万葉集の「防人の歌」と重なります。

今、日本は衣食住足って冠たる世界の一員となっています。今あるのは誰のお陰か、尊い命の代償によって、今の日本があることを肝に銘じなくてはなりません。

『靖國神社』で逢おう。と誓って征で立たれた御英靈に感謝する心がなくては、将来の日本の繁栄は望むべくもありません。御英靈を敬い祀るのは残された日本民族の責務です。

世界中どの国に、御国のために命を賭された方々を祀らない国がありませんか。現在の
のような、心なき、魂なき日本は世界の笑ひ者です。世界の一員として、自国を愛し、日
本人だと言う自負・自覚・誇りがなければ世界平和を希求することは覺つかないことです。
万葉集「防人の歌」は『武』のこのころを見事にうたいあげています。御英霊をすら
蔑ないがしろにして顧みない『武』のこのころの欠落した文弱日本の威儀が正されなければなりません。

先祖が永々として築いてきた日本の栄光はえある将来のために、靖國神社の御英霊の大前に
誓いを新たにします。『奮武』Ⅱ『神武の本もとに就くところ』を誓うのでありま
す。

(註) 客観的事実自体には歴史の意味はない。その事実がどういふふうに感じられ、どういふふう
に考へられてゐたかといふことが歴史的事実である。小林秀雄

詩歌と文芸のみが資料記録のなしえぬ歴史の信実を人心の奥深くからゆり起こす。保田與重
郎

・高見神社宮司 福岡県北九州市八幡東区高見一——一

時代に合わせた“まつり”のかたち

ふる
や
まさ
ひろ
古屋真弘

みなさん、こんにちは。今日は、神社のまつりについてお話したいと思います。

一口にまつりと言っても、皆さんの心の中に抱かれる印象は、それぞれ違うと思います。また、私も神職と、みなさんのまつりに対する考え方にも、ずいぶん大きな違いがあります。一般に神道の考え方には、まつりは儀礼を通して神様のお力を頂くことと言われています。たとえば、豊作を祈る春祭り、神様の恩恵に感謝する秋祭りなど、日本の四季や風土・土壌と結びついて毎年繰り返され、年中行事として、継承されています。

しかしながら、皆さんがまつりという言葉を目にした時の印象は、夜店・神輿・花火・浴衣、そんな所ではないでしょうか。

私が、地鎮祭等にご奉仕した時などに「祭りに行ってきた」というと、普通の友人に、「お祭りってお店はでていたの」と言われ、面食らった事が、何度もあります。

これは、今の日本のごく普通の方の声と考えて良いかと思えます。

反面、三社祭りのように、神輿を担ぐということに憧れ、一年を祭りとともに過ごしていると言っても過言でない若者が増えているのも事実でしょうし、新しい宗教にとりつかれてしまう若者が年々増加している現実もあります。

私は、ここで皆様方と、先程述べましたまつりに対する現実的な誤解を考えながら、これからのまつりの形を、祭儀、儀式として厳守しつつ、また、皆様方に分りやすく、親しみ易いまつりとして継承していくかを考えてみたいと思います。

今述べました、神職が考える祭りを「セレモニーとしての祭」と考えます。ご承知のようにセレモニーとは、式典・儀式の意味ですが、ここでは、伝統にのっとった祭儀を遂行することと考えます。また、皆様方が考えるまつりを「フェスティバルとしての祭」と考えます。これ又直訳すれば、祭典というような意味ですが、同じお祭りでも、カーニバル（にぎやかな催し物）に近いかもしれません。

この「セレモニーとしての祭」と「フェスティバルとしての祭り」の接点を見つけ、新しいまつりの形を築きあげることそれが、私たち神職の勤めであり、それを理解していただき共に祭りを盛り上げていただくのが、皆様へ神様がお与えになった命題だと思います。

私は、この命題を遂行するために、三つの要素が必要だと考えます。

一つは、神職側の対応の柔軟性。二つ目は、一般の方への情報宣伝活動の強化、三つ目は神賑わいとしてのイベントの活用です。

一つ目の神職側の対応の柔軟性は、先程申し上げました、セレモニーとしての祭りを踏襲しながら、フェスティバルとしての祭りの部分を一連の祭儀の中にどのように取り組めるかと思ふ、神職側の姿勢の変化が必要と思ふ。

二つ目の情報宣伝活動の強化については、既に多くの神社で実施していることと思ふすが、直接皆さんが目にし、手にする印刷物等で、皆さんに分かりやすい言葉で書かれたセレモニーの部分とフェスティバルの部分の明確に判断できる宣伝物で、神職・皆さんとともに考え、創り上げたという実感のわく物が良いと思ふ。この点は、行政主導の何々実行委員会が作るような、形式的なものではいけないと思ふ。

三つ目は、イベントの活用です。現在、神社でも有名な芸能人や有名な文化人をお呼びして有意義なイベントが開催されているようですが、ここで話したいイベントというのは、そういった大掛かりなものでなく、フェスティバルとしてまつりを盛り上げるイベントのことを言います。内容的には、いろいろ考えられますが、大切な事は、祭儀を厳修す

る中で、一般の方が、参加し楽しめる、フェスティバル的要素をもった部分を盛り込む事だと思っています。

このフェスティバルとセレモニーの接点を神職も皆様も共にお考えいただき、神職側はセレモニーとしての祭りを厳修しながら、フェスティバルとしてのまつりに歩み寄る姿勢。また、皆様方は、セレモニーとしてのまつりを認識していただく中で、皆様方がより親しめるようなまつりのかたちを創り出していく姿勢をお持ちいただきたいと思います。

来るべき二十一世紀に向けて、神職と皆様方が一体となって、ただ流されるのではなく、まつりに参加、協力しながら盛り上げていくことが、神様もお喜びになり、住民と一体になった、素晴らしいお祭りが築きあげられる事と思います。

ご清聴ありがとうございます。

・ 浅間神社権禰宣 山梨県東八代郡一宮町一ノ宮一六八四

「神」になつた警官

―靖國の英靈を偲ぶ―

徳久豊彦

時は明治二十八年、今から百年前、処は佐賀県東松浦郡肥前町高串地区に起つた話であります。肥前町は佐賀県の北、玄界灘に面した唐津市の西にある町です。

この年七月、熊本県泗水町出身の増田敬太郎巡査は、佐賀県巡査を拝命、七月十九日に唐津警察署に赴任、肥前町入野駐在所勤務を命ぜられました。この月、高串地区ではコレラが流行、増田巡査は早速この防疫対策に活躍することになりました。村人に、コレラに対する防疫知識を教えながら、自ら、病人の手当・病死者の埋葬など、不眠不休で奔走しました。村人には病人との接触禁止を説きながら、自らは、それら病人の世話に当りました。「感染する」「感染すれば生命にかかわる」と知り抜きながら、連日連夜身を挺してこれらことに当り、終に自らもコレラに感染、五日後の七月二十六日、二十六歳の若き生涯を閉じたのであります。

「余は死しても、この防疫のために尽さん。この地向後悪疫を入れしめず」、これは瀕死の床で増田巡査が口にした遺言であります。増田巡査の死から間もなく、コレラは潮を引くように流行が止り、終息しました。着任から死亡まで僅か一週間、しかしこの一週間の増田巡査の、私を無にした懸命の働きの中に、村人は「神」を見たのであります。

村人はその翌年八月、増田巡査を顕彰する碑を建てました。そしてさらに十月には、祠にかかりました。翌年には拝殿が出来、その名も増田神社となったのであります。このうち、同地区で流行病は発生していないと言うことです。

毎年命日の七月二十六日に夏祭りが行われ、地区あげての賑わいを見せます。佐賀県警察本部長が祭文を読み、初任警察官が参拝して「警神」の遺徳にあやかり、立派な警察官になり、治安活動に挺身することを誓います。

「無私」の人が「神」になった、百年前のまだ生なま生なましい実話であります。人が神となる、人を神と祀る、これは日本民族の美わしい宗教心であります。

これが更に広く、更に高く高められたものが、靖國の信仰でありましょう。

明治天皇の深い思召しによって、国難に殉じた英霊たちを明治二年、東京九段坂上に鎮祭創建された靖國神社は、明治・大正・昭和と歴代の天皇の度々の行幸を仰ぎ、御親拝を

賜わっております。また春秋の例大祭ごとに勅使の御参向を賜わり、各皇族方が御拝礼になります。神社の歴史はあさひにもかかわらず、国民の崇敬はきわめて深いものがあります。日清・日露両戦役をはじめ、先の大東亜戦争におきましても、わが将兵たちは、「戦死すれば靖國神社」と強い誇をもって戦場に赴きました。

しかも靖國神社にまつられる光榮は、貧富・貴賤・勲等・賢愚・老若・男女の区別なく、国難に命をささげた国民すべてにゆるされます。靖國神社は、殉難した将兵たちの「功業」というよりも、その「忠誠心」をたたえるために創建されたのです。この忠誠心こそが、国家・国民を守る道義の根本であります。靖國神社は日本民族の道義の殿堂であります。この「道義の殿堂」がないがしろにされては、国民の道義がすたれます。

思えば、日本の総理大臣が靖國神社公式参拝を中止してから既に久しい。昭和六十年八月十四日、政府は「靖國神社は、我が国の戦没者追悼の中心的施設である」との新たな政府見解を発表し、翌十五日、中曽根首相をはじめ閣僚が公式参拝を行いました。しかし、その時の中曽根首相は、靖國神社に来て、お祓いも受けず、玉串奉奠も、二拝二拍手一拝の作法も行わず、ただ一礼したままの非礼極まるものでありました。その後の歴代の首相は、春秋の例大祭・八月十五日と靖國神社参拝をしていません。その中止の理由たるや、

首相の靖國神社参拝を、中国などから抗議されたので、それらの国の国民感情に配慮して中止したと言うのであります。

靖國神社の英霊に参拝する総理大臣の神聖な公務を、内政干渉にも等しい抗議で中止するとは、独立国たる日本国政府のとるべき態度ではありません。

政治腐敗墮落、そして国民全体の道義的退廃の根本原因は、祖国に殉じた英霊へのみ祭りを日本国が等閑にして顧みない所にあるのであります。然るに一旦、外国を訪問すれば、先づその国の戦死者の眠る施設を訪れ、花輪を捧げて最高の礼を尽します。何ともやりきれない話ではありませんか。

このたびの自・社・さ連合の村山新政権に期待するものは何もあります。ただ、中国とこれまで太いパイプを持って来た社会党村山委員長が、総理大臣として靖國神社に参拝するならば、国民は感動し、社会党を見直し、新政権を信頼し、支持するであります。そして世界の国も日本国への尊敬と信頼を深めることでありましょう。

「英霊を敬うところ」を先づ第一義にして、その第一歩を踏み出して貰いたいと切に祈るのみであります。

自然いきいき鎮守の森

西^{にし}村^{むら}純^{じゅん}子^こ

みなさまのお顔はすこぶるお元気で、生き生きと、各神社での毎日のご奉仕の努力もさることながら、終戦五〇年を迎えんとする今日、当靖國神社英霊の御霊の御加護によるものと心から、感謝とお慶び申し上げます。

今年は、から梅雨で、毎日うだるような暑さ全国各地、特に関西、四国では深刻な水不足で、大変でございます。

水は森で、養われて、土をつくり、大地をおさえ、水や風の害を防ぎ、汚れた空気を浄化して、私達のくらしは、森が守ってくれているのです。

森は美しく、優しい、安らぎを感じる。中に入ると、ひんやりとして、風が爽やかで気持ちよく、不思議な香りが漂ってくる。小鳥の声、せせらぎの音が聞こえ、水辺の清水は冷たくて、おいしい。

さて、自然の森の素晴らしさ、森林を少し掘り下げて、考えてみたいと思います。先ず、二酸化炭素を吸収して、酸素を供給してくれます。また高温化をおさえ、夏は大変涼しいです。また保健に役立ち、またリクリエーションの場になり、環境の指標になり、また気温や温度を適度に保ち、風や霧を防ぎ潮害や騒音をおさえ、ほこりや汚染物を吸着し、また野生鳥獣を保全して、土砂崩壊、土壌侵食、落石を防止します。洪水や干害を防止し、水質を保全してくれます。世界的課題のこのような貴重な自然、古代から人間との強いきずなで結ばれています。大切に守りつづけていかなくはなりません。

ご承知のように、日本で一番古い社、奈良の大神神社のように、森、お山そのものが、ご神体で、いわゆる、本殿はなく、森、お山を祀っているのでございます。

神棲む森から、時代と共に移り変わり、神棲む良い森にして、いきましよう。

天皇、皇后両陛下におかせられては、毎年植樹祭の伝統行事を行っておられます。

今年は兵庫県で、ございましたか、私達神社界でも、それに準じて、各神社で植樹をしています。私方は、瀬戸内海の小さな島、大きな森が、あるわけではありませんが、氏子に一本でも多く、環境に合った献木をお願いし献木の掲示板を作って、名前を残して行きながら、少しでも鎮守の森にふさわしく育つよう、努力しています。

つい先日、六月下旬でございました。広島県の方が、これ、広島市内の方に教えていただいたのだけと、丁度、東南の方向に、良き湧き水がある。そこで、その湧き水を頂いて飲むと、体調がよくなる。午後九時から、十二時頃までの時間に持ち帰り、少しずつ飲みなさいとのことで、当生名八幡神社におい出になりました。その方が東南の各地を探したそうです。泉という湧き水の井戸と手水舎が並んであり、井戸と、手水舎が一緒にある所は、まれですとのことでした。香川県の方まで探されたそうです。昔からの大切な井戸ですから、手水舎と一緒に銅板の屋根で、ゴミも入らないように格子のふたをして、感謝の意をこめて、再建のときに造ったのです。彌都波能賣神に感謝しながら、お蔭で充分水が、ございます。水道は広島県より海を渡って、きていますが、一、二、三日前から、四十パーセントしぼり、出が悪くなって来ています。

私の目に映る、小じんまりとした森は、たいいてい鎮守の森でございます。美しい、優しい森の中に神さまが、おわします。

素晴らしい、理想的な森を造っていかなくれないと思います。鎮守の森を守るのは、神職の使命、それには神職、総代さんの積極的な姿勢が、重要でありましょう。

手水舎の水を小鳥たちが、人のいない時、何時も飲みにきています。命の水です。

昔から、人間が住む家を建てる場合、先ず水のある所、水の湧く所に家を建てたものです。先ず一番に水。命の水がなくては、生きていけない。今日は水道ですから、どこでも家が建ちます。古い家程、日当りの良い森をバックにして、良い環境に建っています。

大きな古い木を見た時は神々しい感じがいたしますし、深い森に入った時は、落付きと神秘的な気分が増します。

自然とは、切っても切れない関係、共にいきいきと、環境のよい、安らぎのある、みんな、自然いきいき鎮守の森を、見直し、理想の鎮守の森を、共にいきいき生き続けて、鎮守の森を造って参りましょう。

・ 生名八幡神社宮司 愛媛県越智郡生名村九四六

郷土の英霊を偲びて

河野

まこと
誠

終戦後五十年が間もなくやって来ます。五十年忌の法要があちらでも、こちらでも行われているようです。先の大戦で亡くなられた方の法要なのです。

然し、この法要に当たって、どれだけの人達が故人の事について知っているでしょう。最もよく知っている筈の親は殆ど亡くなれています。そして未亡人として、五十年にわたり、心の中に夫を恋い慕ってきました人達も既に古稀を越してしまいました。

「ご英霊のご家庭の方々もお年をとられたなあ！」の感慨を慰霊祭を行います毎に深くします。

戦没者の慰霊祭も年毎に風化していくとの声は、あちらこちらで聞かれます。

然し、知らない人々が大部分となってしまうた今、どの様にして、御英霊の御遺徳を伝えて行くかを考える事が大切となって来たと思います。

遺族の方々の中には、今更主人の事を語って見ても、悲しみが増すだけで、誰も分かってくれるものではないと思われ、敢えて、語る事を控えている方もおられると思います。たしかに同じ思いで、完全に同感する事はできません。しかし、知らないより、知っている方が理解するに役立ちます。

さて、ラビ攻略作戦が、東部ニューギニアのポートモレスビーの東、ミル湾の最奥のラビ周辺で行われ、元呉第五特別陸戦隊員として、昭和十七年八月二十五日より同年九月六日の間参戦し、戦死されました杉本正明命の戦績を、簡単に追って見たいと思います。

ガダルカナルの作戦に成功し、戦況好転したと判断した司令部が、ラビに建設されている飛行場を奇襲占領すべくたてられた作戦でした。ところが、作戦上の色々の齟齬が生まれ、作戦部隊は孤立し、弾薬、食料を失い、更に後方部隊との通信連絡さえも、思うに任せず、殆ど全滅の状態で撤退しました。

この作戦で戦死されたのです。

後年、戦友に託された遺書には、子供が男の児なれば、学校に行かせて教育をつけるようにと書かれ、奥さんには、戦死した時には、再婚をするようにと、奥さんと家族の将来を案じておられる心情が切々と記されていたといえます。妊娠を知って出征した正明命は、

わが子を一目も見ず、南海の地に散って行かれたのです。

奥さんが二十二歳の時だったと言います。

生まれた子は女の子でした。

御英霊の御心情を思うと、やり切れない思いがいたします。

昔も今も、命を大切に思う事は誰も同じです。祖国の為、可愛い妻子、父母の住む日本の発展の為に、命を捧げられたのです。

終戦五十年を迎えるとき、あらためて、その戦績を調べるとか、遺徳を偲ぶ事をすべきだと思います。

この大戦で大濱町出身の御英霊は八十余柱です。そして、その最初の御英霊は昭和十二年の河野未治命でした。

未治命は出征前は、青年団長でした。村民からも、また青年達からも、指導者として多くの期待を掛けられていた未治命の戦死公報に、驚き悲しむ村民の様子が、当時の青年雑誌に詳しく書かれています。

昭和十二年七月三十日に支那事変に応召。同年八月二十日、支那河北省、昌平県、石頭峰南方高地に於いて戦死す。行年二十五歳。同年九月二十日発行の青年雑誌の発行者は、

一箇月前に戦死された団長未治命になっています。

何しろ、家では将来の大黒柱、地域では優れた指導者になるべき人が、この大戦で亡くなられたのです。

私達は出来るだけ詳しく、正しく後世に伝えなければなりません。

私が神社誌を書き始めて三年を経過しました。知らなければ、見落とす石碑や、石灯籠も、知ってくれば、見方も変われば、考え方も変わってきます。

皆さんと共に、出来るだけ多くの御英霊の遺徳を後世に伝え残したいと思います。それが、御英霊の御心をお慰め申し上げる道であると思います。また、若い人達への貴重な遺産となると思います。

今後とも、一層のご協力をお願いすると共に皆様が御元気で、来年もこの八月十五日の慰霊祭にお会い出来る事を願って、本日のご挨拶と致します。

・ 齋島神社宮司 いひしま 広島県三原市宮沖町六五七―三

日本の祈り

大宮四郎

このたび、かしこくも、靖國のみ社に日本の祈りを奉じたく、瀬戸内海から飛び立って参りました。島から島へ眼下遙かに、淡路島が見えました。工事中の明石海峡が見えました。

これはまさに、^{あめ}「天の浮橋だな」と思はず、伊邪那伎、伊邪那美、二柱の大神の神話を思い、その夢を追いつづけてまいりました。

「二柱の大神、天の浮橋の上に立たせ給ひて、天の沼矛^{ぬほこ}をもつて、塩こをろ、こをろにかきなし給へば、その矛のさきより垂^{したた}落る塩、こりて島となる、おのころ島とはこれなり」壮大なる国生みの神話は、やがて、天照大神の誕生に及びます。「この時、伊邪那伎命、いたくよろこばして詔^{うり}りたまはく、吾はみこ生み生みて、生みのはてに三貴子^{みはしらのおすみこ}を得たり、^な汝が命は高天原をしらせ」と事依さし給ひき。」

原始、女性は太陽であつた。そのすばらしい日本神話の夢を象徵するように、今、向井千秋さんは、世界の唯一人の日本女性として、その天女のような夢を、地球のふるさとに伝えている。すばらしい！ほんとにすばらしい！その夢のうつゝに窓をみると忽然と、窓の向うに、霊峰富士が現れました。美しい、なんという壮大な日本の姿であらう、これが日本だと思わず目を見開きました。

万代よろずよの国のしづめと 大空に

あふぐは富士の たかねなりけり

これは明治天皇の御製でありますが、富士には壮大な日本の意志があるということよさに、今更に深い感動を覚えたのであります。

日本には富士はもとより、万葉集にもすばらしい山の歌があります。それは千三百年も昔の欽明天皇の御代の大御歌でありますが、

やまとには むら山あれど 取よろふ

天の香具山 のぼり立ち 国見をすれば

国原は 煙たちたつ 海原は 鷗たちたつ

うまし国ぞ 靖島あきつ やまとの国は (巻二)

という歌であります。山には感動がある。日本の大自然には地球にほとぼしる、美しい祈りがあると、今更に痛感いたします。

私は昨年十一月、戦友に招かれて、富山へまいりました。富山は昔ながらに立山をはじめ、黒部の峡谷がすばらしい紅葉に色どられていました。まさに、山紫水明そのものでありました。日本の地霊、ここにありと申すべきでありましょうか。余りの美しさに思わず息を飲みました。万葉集（巻一八）には

天平感宝元年 越中の国守の館にて、大伴家持よ作めりと書いてある長歌がありますが、あの長歌の一節が、“海ゆかば”の歌であります。

“海ゆかば みづく屍 山行かば 草むす屍 大君の へにこそ死なめ かへりみはせじ”これだ。この歌こそは越中の国で知った家持の感激であった。そのことにはじめて深い感動を覚え命ふるえる思いにひたりつくしました。

なんという山の美しくさ、なんという水の清らかさ、こんなすばらしい国、こんなすばらしい国土であればこそ、この国をよさしたまえる大君のみことかしこみ、この美しい国を守ろう、この美しい大君のしきます国の為なら、いづくの果、みづく屍、草むす屍、なに惜しかろうぞといふ、その家持の祈りが、初めて解って、深い感動に打ちふるえたの

であります。

私は本日靖國のみやしろに参じております。このお社には、この日本を思い、みづく屍、草むす屍と果て給いし英霊のみ魂が鎮まつております。私は今、大伴家持から受けた感動そのままに、心から熱禱を捧げたいと存じます。心から日本の祈りを奉じたい一念でございます。

神代の昔 伊邪那伎大神、天照大神に「汝がみことは高天原をしらせと事依さしまつりき」そのことよさしを信じて、原始太陽の神と仰がれ給いし神のみことを、今、向井千秋という一人の日本女性が、天女の思いを抱いて、この壮大なる宇宙のあなたからこの美しい地球のふるさと日本に向つて、日、出づる国の天女の言霊ことだまを伝えてくれました。

私は静かに英霊のみたまに、この美しい風土日本の祈りを、あまつのりとのふとのりのごととして、のりつたえたいと思います。

五十年前、英霊と共に歌った感動を、なつかしく歌い上げて、みたまやすかれと心から、祈りあげたいと思うものであります。

泣くな なげくな かならず かへる

桐のこばこに にしき着て 会ひに来てくれ、九段坂”

山崎闇齋・神道への回帰

芦^{あし}原^{はら}高^{たか}穂^ほ

山崎闇齋という先生は、今から三百年程前に、全国に六千人の弟子がいたという大学者でした。

京都で生まれましたが、貧しい浪人暮らしの中で、男女二人の四人兄妹の末子に生まれ、母さんは厳格な躰を施したそうですが、幼年時代はとにかく鼻っ柱が強く、余りに腕白で暴れん坊だったので、両親も困り果て、十二歳の時に比叡山に入れられ、坊さんの修業をさせられました。

闇齋は乱暴極まる小坊主で兄弟子達を困らせましたが、頭の良いことは拔群で、国沢大

藏經を片っ端から暗誦して皆を驚かしたと言うことです。

後に禅宗の妙心寺に移って正式に出家得度しましたが、この時に四国高知の野中兼山と出会い、十九歳の時に土佐藩主山内家の菩提寺である吸江寺の住職に後継ぎがないため、見込まれて土佐に行きました。闇齋先生の一大転機が訪れた訳です。

土佐は南学といって漢学の盛んな土地柄のため、家老である野中兼山の勧めで、藩で名高い谷時中という先生について朱子学を学びました。

処がこの谷時中先生は、お寺で生れ育ったにもかかわらず、仏教が大嫌いで講義の中でも、しばしば仏教の矛盾や批判が飛出して、弟子の闇齋もこれに強く影響されました。

或る日の講義の席上で、闇齋は頭からポッポと湯気を立て、真紅な顔になり全身からジITTERと汗を流し乍ら、先生の講義の終わった所で、スクッと立ち上り躰を震わせながら一同に向って「今日只今をもって僧侶を止めて還俗いたします」と宣言しました。

一同は呆氣にとられました。本人の決意は固く、勿論藩主の怒りに触れて吸江寺を追われ京都に帰りました。

躬ら職を捨てた闇齋は、差当って生活に困りましたが、家老で学者の野中兼山が、闇齋の学識を惜んで、仕送を続けたと言われています。

この頃京都での勉強は朱子学が中心ですが、風邪を引いて三十八度位熱があっても、この位のことでは学習を休んでは大成は望めないと、坐ったまま頭を柱にしぼりつけて本を読み続けたと言われています。

三十六歳の時に、賀茂神社の神主の娘と結婚しました。そしてこの頃から「神道への関心が深まり、三十八歳で塾を開いて弟子に教授し初めましたが、この年「伊勢太神宮儀式序」という本を書いていきます。

四十一歳の時に、江戸に出て諸大名に招かれて朱子学や神道を教えながら、京都と往来し、その間に時折、伊勢神宮に詣でては、伊勢神道を学び、五十二歳の時神宮大宮司の河辺精長から中臣祓の伝授を受けています。

また、當時有名だった吉川惟足という神道学者から、吉田流の神道をも伝授されています。

ここで朱子学を最高の学問と考えていた闇齋が、何故神道に関心を寄せたかについて、考えて見なければなりません。

それには賀茂神社の神主の娘と結婚したことが一つの動機かと思われますが、もっと深い根拠がありそうです。

よく調べて見ますと、彼の父親が徹底した敬神家で、毎朝三社託宣の御神号軸に拝礼して御託宣を朗唱して怠らないばかりか、その軸を掛け外しする時は必ず衣服を改め、含漱^{うがい}を手水してからでなければ扱わなかったと言われています。

三社託宣と言うのは、真中に天照皇大神、右に八幡大菩薩、左に春日大明神の三神を掛軸として、天照皇大神を正直、八幡大神を清浄、春日明神を慈悲の三徳の守護神として祭った信仰で、江戸時代広く一般に普及していました。

この御託宣に対する父親の徹底した信仰的態度が、幼い時からの闇齋の精神の奥底に、不滅の灯として燃え続けていたものが、中年学問の成熟と共に燃え上り、逆には神道と儒教の一致を中心とする垂加神道という理論を興して、明治維新を生み出す原動力となったことは、日本思想史上有名な事実であります。

このことを通じて我々日本人は、高度な学問もさること乍ら、日常家庭における祭事が如何に大切であるかを、今更の様に思い知らされる次第でございます。

御清聴有難うございました。

・ 旭川神社禰宣 北海道旭川市東旭川南一条六―八一―四

戦没者慰霊祭に奉仕して

本^{もと}澤^{さわ}みさ

このような研修会に参加させていただき学習できます事を有難く思います。

今日は「戦没者慰霊祭に奉仕して」と題して、奉仕するに至った経緯と、奉仕して感じた事を述べさせていただき、皆様のご指導を賜りたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

私の居住地の南部町は、旧向村と旧平良崎村が合併して、昭和三十四年に誕生した町であります。町では戦没者慰霊祭が神式・仏式と交互に、毎年町の施設であります公民館で執行されております。此の事に対する不満行為ではないのですが、旧向村に経ヶ森という環境のいい所に、すばらしい招魂碑が撤去されずに残されているのに、台座が傷んでいたり、碑の辺りが荒れているのに気付かれた現在の奉賛会の会長様方が、「町として中央公民館の施設の中で、慰霊祭が行われているのも意義があると思うが、あの碑を活かして、

招魂碑の前で旧向村単独で執行されるようにしたかどうか。」と有志に提案され、実情の説明を聴かれた有志の賛成を得て、更に戦没者の遺族だけでなく、一般の方の賛同も得られ、協力しようという事になり、奉賛会を結成して実施されるようになったという事でした。護国の英霊に対する尊崇と感謝の誠を表わそうと努めました。

碑の台座やその辺りがすばらしく整備され、一変して四年目の今年は、大東亜戦争戦没者五十年祭に旧向村戦没者慰霊祭が、つい此の間七月十六日に執行されました。

世の中は変わりましたね。私共は小学校の頃、旧向村の招魂祭には、全小学校の児童が先生に引率されて参拝させられたものでした。奉拝した後、神饌を戴いて喜んで帰ったあの頃を懐かしく思い出します。神饌は紅白の饅頭でした。

児童・生徒の参拝が、過去のように行われるようになってほしいと私には思われます。

それは、招魂祭なり慰霊祭なりに参列し、奉拝する事によってその趣旨が分かり、生かされて生きるその生き方が、育まれるのではないかと思われるからであります。

招魂碑の前で慰霊祭を執行するについて、他界した私の父が、長い間奉仕された所だと聴かされ、依頼を受けた私は、亡父のご加護を頂いて奉仕させていただこうかと心を決めて快諾しました。それから四年間奉仕させていただいておりますが、今年も祭員は女性神

職二人で、私は斎主として山崎様のご支援を頂いて行いました。式は次第に従って進められ、無事に終える事ができました。亡父のご加護をお祈りして精いっぱい奉仕しました。

慰霊祭に奉仕して、私が強く感じた事の一つは、式の中で最重要視しなければならないのは祝詞だと思った事であります。遺族の方々の声として耳にした事は、「故人の氏名を読み上げられるのを待つ。とか、懐かしく思い出され、胸がいっぱいになり涙が出る。遺族の誰もが同じだと思う。」等と言われた事からでした。

若し氏名を読み上げる声が聞えなかったらどんな思いをさせるだろうか。そう思った私は、祝詞の中で読み上げるのですから、場に応じた声の高さ・速さ・氏名を誤読せぬよう吟味して、何度か練習をして、精いっぱい奏読しました。式が終わって「斎主挨拶」と呼ばれ、マイクを前にして立ち、次のような事を述べました。(四年目の今年の挨拶の一部です。)

「今日、執行われました大東亜戦争戦没者五十年祭と旧向村戦没者慰霊祭が、皆様のご協力に依りまして無事に終える事ができました。有難うございました。

さて、慰霊祭ってどんな意味を持つのだろうか。次のような歌があります。『面影を思い浮かべてつくづく、逝きにし人を偲ぶ今日かな』と。今日はこんな日であります。顔や

姿を思い出し、あんな事、こんな事と、故人をじつくりと偲ぶ日なんです。

今日は、招魂碑―魂を招く石ぶみ―の前で、百四柱の英霊をお招きして、奉拝されたと思います。ご参列下さった方々の中には、父或は子・夫を亡くされた方や、曾て軍籍に在った方もいらっしゃると思いますが、皆様はきつと英霊に対して『私共は生かされている事に感謝し、精いっぱい家業に励み、家内安全、幸な生活ができるように努めます。』と生きる心構えについて約束され、お守り下さる様にと祈願し、ご冥福をお祈りされたと思います。』〈以上〉

五十年祭を執行しました今年、遺族の方々の心境について拝聴し、痛感させられた事は、閣僚の靖國神社公式参拝についてでした。何故、嫌な事を見聞・視聴しなければならぬのか。遺族の皆様の立場になってみれば、恨めしくも、悲しくもなります。英霊のご冥福をお祈りするのが何故悪いのか。日本人なら誰でも自由に参拝できる靖國神社になってほしいです。英霊の鎮まりまします靖國神社です。今日は靖國神社に参拝して、特に強く感じました。

これは小冊子で知った事ですが、招魂碑・忠魂碑が、撤去されずに建てられた仮残されている所が随分あり、それが塵芥捨て場になっている所があるという記事でありました。

こんな状態にするまいと、旧向村の方々が、台座の修復工事から環境整備まで、協力して当たり、招魂碑の前で慰霊祭が執行されるようになった事は、実に立派な行為だと感心しております。旧向村の奉賛会の皆様に感謝の念でいっぱいです。継続されるよう念じております。「おら方の父ちゃん達は偉い」と直会の席で言いました。

塵芥捨て場になっている所の碑は、一日も早く活かされるようになる事を念じ、ご参会の皆様の方々のご健勝を祈念し、最後になりましたが、ここ靖國神社の英霊のご冥福をお祈りして、拙ない私の話を終ります。有難うございました。

・八幡宮宮司 青森県三戸郡南部町小向字広辺三五

いのち
命

星^{ほし}野^の暢^{のぶ}廣^{ひろ}

私の奉務神社で赤ちゃんの初宮詣りの時に、お乳の話を申し上げ出したのは、私の父の時代で昭和三十年代の中頃であったと思います。当時は粉ミルクで赤ちゃんを育てますのが常識であるという風潮になろうとしている頃でありました。父の訴えを引継いで今日も私が申し上げ続けております。

お一人目のお産ですか。それではお話し申し上げていことがあります。それはお乳のことです。お母さんのお腹の中で大切に一年近くも育てなさって来た赤ちゃんを、お腹から外に出て来ていきなり外の食物で育てるというのでは無くて、同じお母さんから出て来るお乳を飲ませて育てることは、大変大切なことです。牛乳にしても粉ミルクにしても所詮動物のお乳で、赤ちゃんにとっては外の食物です。粉ミルクで育てた赤ちゃんは麻疹が流行したりしてかかりますと、全身真黒になる様な大きな麻疹をするそうです。母乳は母

親の赤い血液から数十秒にして白いチチに変えられるといわれます。それだけの時間でどの位の量が変わえられるかは知りませんが、兎に角、母親の血液の栄養分がそのまま赤ちゃんに注ぎ込まれる訳です。母乳は冬でも暖かく、春も秋も夏も適温です。お母さんは何時も携帯用のミルクタンクを内蔵しているんです。自然に適うということは大変素晴らしい事でもありますし、大切なことでもあります。何億年もの大昔から年輪を重ねて自然の内に人間の子育てに適合した姿というものが出来上って来ているのであります。お一人目の赤ちゃんの時はそうでもありませんが、三人目四人目になりますとお乳が出にくくなることがあります。その時に諦めてしまったらもう出ません。出にくくなることがあったら、諦めて手っ取り早い粉ミルクにしてしまわないで、頑張っていた方がいいのです。大切なお子様ですからどうか貴女のお乳でお育てになって下さい。どうか自然に適った子育てをなさって下さいと、お願いを致しております。

自然に適うということは大変素晴らしい大切なことであります。我々人間は、人間の知恵で作り上げて来たものに依存した生活を続けていて、自然に適った生活というものを忘却しかけているのではないのでしょうか。

さて、人間のこの緻密な精巧な身体と、思考力と感情、霊長類と位置付けられ万物の霊

長とされるタマを宿した身体は、総て特別に造られたものではなく、地上で自然に適合した中から生れ重ねて自然の内に出来上って来たものであります。現代科学の技術でこれを造り出そうとして考えて見ます時に、何億年もの間、自然に適い続けて来たこの人間というものの壮大さが分ります。脳の内部の精密なメカニズム、脳と全身を繋ぐメカニズム、耳と聴覚、目と視覚、鼻と嗅覚これらは一つ容器に収められて相互関連しているし、又別の使命も果している。又全身の皮膚、筋肉、骨髄、毛細血管から神経構造、生殖メカニズム等々、そしてこれらは目に見えない程の小さなものから始って誕生、子供から大人への成長、そして死。科学技術をいかに駆使しても、この人間を造り出す事は不可能であります。しょう。

我が祖先達は、この壮大な命の流れを「チ」という語で表して来ました。赤い血液を「チ」、白いチを「チチ」と言っている様に思われます。父親も「チチ」と呼ばれますし、孫が出来ますとヂヂとなります。父親のチチが送り込まれて、母親のお腹の中でムスバレて、ムサれて産れ出て来るのがムスコ、ムスメであります。それを母親のチが形を変えてチチとなつて、栄養分を注ぎ込むのであります。チという語は言葉の中でも源初的なものと考えられますが、命の流れの実体をついた言葉であるように思われます。イノチという

言葉にも又チがついています。我が祖先達はチを靈物と感じ、天地のムスビの神の神威をそこに感じ、知って来たものでありましょう。

中学生の丁度生意気な時代には、親と言ひ争いになって「何で産んだ」と親にどなりつけた等ということ聞きますが、或は又どこの家系が古いとか、どこの家は分家であるから新しい等と申しますが、たしかに私共は皆親があつて生れて来たもので、その親も又それぞれの両親があつて生れて来たものであります。しかしながら皆一〇〇代や二〇〇代位の古さではありません。およそ地上に人間の大元となる生命が芽生えてよりこの方、数千万年、あるいは十億年を超えてでしょうか、その間一代としてとぎれることが無く、チの流れが受け続けられたからこそ、今日ここに私の身体がありますし、皆様方の身体があると言えましょう。その間に切れてしまつて続かなかったチの流れは、いかに多いことございましょう。そしてもう少し考えて見ますと、私共はこの地上に生を得ていますが、動物に流れても、植物に生まれても何ら不思議ではなかったのであります。それを人間に生れ、しかも日本に生まれました。日本より少し南へ行けば暑い国々、北に行けば厳しい寒さ、そして西へ行けば内陸気候と砂漠。四方を海に囲まれた四季のはっきりした美しい国日本の如き土地は、この世界で本当に一握り、ニュージーランド付近、地中海付近、カリフォ

ルニア沿岸等数ヶ所でありましょう。我々は、しかも今の日本に生きているのであります。目を地上から空に向けて見ますと、光の速さで一年間つつ走るのを一光年と申しますが、十光年、二十光年地球周囲の宇宙の中に、人間に匹敵する様な生命体を見付けることが出来るでありましょうか。我々はこの地球上で最も恵まれた所に住み、そして恵まれた時代の日本に生活し、周辺宇宙の中で最たる生き物なのであります。その命を賜っている間、大変貴重なる存在なのであります。

生命の尊厳について触れ、神道の信仰観の一部について現代的に触れつつ、お話を進めてまいりましたが、身をもって祖国を守り、古郷や親、子を守ろうとして自らの生命を散らせて行かれた英霊の鎮り坐す靖國神社において、我国で結び嗣がれて来た生き方が失われつつある今の世を憂いつつ、今の世の使命観をもって英霊に恥じぬ様に生き生きて、悠々と死んで行くのではありませんかと申し述べさせていただいて、私の命と題する話を終えさせていただきます。

・伊豫稻荷神社禰宜 愛媛県伊豫市稻荷一二三六

国を愛した人々

渡辺知宣

一回目は、家内と一緒に出かけました。十数年前の夏の暑い日でした。会社の名前が大きく書かれた看板があるはずだと思っていました。しかし、それも見当たらず、尋ね尋ねてやっと一軒の木造の古いアパートを捜し当てました。下三軒上三軒の二階建ての二階の中央の部屋が先生のお住まいでした。

先生のお名前は、広島に住んでおられました神社本庁講演講師の今は亡き石井寿夫先生です。そして、会社の名前は「あしかび社」と言いました。葦のかびが生える程、粗末な所と言う意味で「あしかび社」と言うの後で人づてに聞きました。このとき「竹林の七賢人」という中国の古い言葉を思い浮かべました。本当に素晴らしい賢人は、質素な生活をおくっているということを称えた言葉です。

二回目はその二、三年後に一人で出かけました。先生にお尋ねしたい事があったからで

す。

「人類の究極の目標は戦争の無い平和な世界ですから、武器や軍事費、防衛費は皆無にしていく、ゼロにしていくことが必要なのではないのでしょうか」

との私の問いに、先生は

「日本の国の初代の天皇様のお名前は神武天皇様と申します。神武という字は漢字で、神という字と武器の武という字を書きます。この天皇様のお名前が私達に教えてくれることは『神様』の『武器』は必要であるという事です。人を殺すことを目的とした『武器』ではなく、『神様の武器』即ち身を守るため、不正義を改めさせる為の武器は、われわれが人間という生き物である以上どうしても必要なもののなのです。」

「このことは、天皇陛下の皇位継承に不可欠の三種の神器の中に、剣が含まれていることから知ることが出来ます。」

「争い事は人の世の中で無いにこしたことはありません。まして、国と国が戦いお互いに殺し合う戦争は本当にあって欲しく無いことです。しかし、現実には『人間の歴史は戦争の歴史である』と言っても過言でない程戦いの連続です。現在でも多くの国々で、多くの地域で殺し合いが行われています。」

「悲しむべきことですが、血を分けた親子兄弟でさえ、時には喧嘩をしたり、仲たがいをする程ですから、ましてや国が異なり、人種が違う人々であればなおさらの事でしょう。」

「人間である以上、人間という生き物である以上、持って生まれた『サガ』とでも言うべきことかもしれません。」

「それ故にその時代その世界情勢に応じた軍事費、防衛費はどうしても必要なのです。」
「さらに、神武天皇様の『武』という字も、分解すれば矛を止める、あるいは止めさせる、と書きます。神武という日本の国の第一代の天皇様のお名前の何と素晴らしいことでしょう。私達日本人が誇りにして良いお名前です。」

というお答えでした。

なるほどと思いました。今は本当に懐かしい石井先生のお教えです。

靖國神社の御英霊は、日本の国を守る為に、この「神武の精神」を発動された尊い人々で有ると思います。国を愛するが故に親子兄弟と別れ「私達の身がわり」として、一命を捧げられた尊い尊い人々であると思います。

しかし、残念ながら

「先の大戦は日本の国の侵略戦争であった。」
と発言する総理大臣が現れました。このことは

「その侵略戦争に出かけた人々は侵略者である。犯罪者である。」という事を意味します。

国のために、国の命令により大切な命を捧げて戦った人々を犯罪者とは！

残された親子・妻等、遺族の方々のお気持ちはいかばかりでしょう。また、この靖國神社に祀られておられます御英靈は、現在のこの心ない人々の言葉をどんなお気持ちで受けとめておられますようか。

「敵国から見れば犯罪者なるも、我が国にとっては、功勞者なり」

これは東京裁判の後の昭和天皇様のお言葉だとお聞きしたように思いますが、現在の政治家は、敵国から見た見方で我が国をみています。本当に情けない話です。憤りを通り越して悲しさを覚えます。

日本の国の先人は、国の礎とられたそのまた先人を神として祀り、感謝の誠を捧げてこられました。今の世は、この人々に感謝するどころか犯罪者にしたてようとしています。私利私欲、権力欲に目が眩み、また他の国の言いなりになり、博愛者ぶる偽善者と、命

を賭けて自分の国を守ろうとした人々のその開きの何と大きいことか！

私の叔父も昭和十六年数え年二十三歳の若さで満州で戦死されています。本当に残念ではありません。

歴史を正しく理解する為には、その時代の世界の流れと背景をよく知り、その時代の人々の立場に立って判断してみる事が大切であると思います。

コロンブスのアメリカ発見は一四九二年です。コロンブスのイシクニ発見とゴロ合わせで覚えたものです。

このアメリカ発見や、一五二二年のマゼランの世界一周の前後より、白色人種による世界侵略が進み、黄色人種黒色人種の国々は、次々にその支配されるところとなっていきました。

中南米のインカ帝国やマヤ文明、アステカ文明は破壊され、アフリカの人々は奴隷として酷使され、日本以外のアジアの国々も、次々にその植民地として搾取され続けていきました。

日本の国もまさにその独立が危うい状況にありました。五十年前の世界地図を見れば一目でその事を知ることが出来ます。

その時、日本の国を心から愛した人々が、やむにやまらず立ち上がったのが先の大戦です。

自存自衛のための「神武の精神」の発動でありました。しかし、当時の国力には歴然とした差があり、残念ながら戦い破れました。これが当時の世界の大きな歴史の流れです。

もし当時、この「神武の精神」をもたれた人々、国を愛した人々が日本におられなかったら、我が国はどうなっていたでしょうか。

欧米や共産主義のソ連等の国々により日本は分割され、その植民地となり、世界は未だに白色人種支配の世の中のままであつたでしょう。

また、もし当時の日本に「昭和天皇様」という「神武の精神」をお持ちになられた天皇陛下がおられなかったらどうでしょう。

戦争はもっと早期に始まり、さらに悲惨な敗北をし、同じ様に白色人種の植民地となり、黄色人種黒色人種共に、未だに惨めな生活をしていることでしょう。

そして又、当時の世界に日本という国が無かったら、これ又当然、アジアもアフリカの国々も総て欧米に支配され、搾取され続けている今日であつたかもしれません。

有り難いことに、本当に有り難いことに、日本には御英霊のような方々がおられました

し、昭和天皇様がいらっしやいました。そして日本という国が存在しました。

来年は、終戦五十年目を迎えます。

この節目の年を迎えるにあたって今一度、半世紀前の当時の世界の流れと、背景を正しく学び直したいものです。

そして、この五十年目の年を、日本の国と民族を守るため「神武の精神」を発動された「国を愛した人々」に、感謝の誠を捧げる一年にしようではありませんか。

・足野神社宮司 熊本県玉名市立願寺四六〇

靖國の英靈に応え奉らん

秋^{あき}
野^の
義^{よし}
正^{まさ}

来年は終戦五十周年を迎えますが、私は昭和十九年に一年繰上げ徴兵検査を受け、二十

年一月五日に十九歳で岐阜の歩兵部隊に入隊しました。南方に派遣の挺身隊として、飛行場襲撃の訓練を受けましたが、その後本土決戦に備え、アメリカ軍上陸の対戦車肉攻の訓練に代りました。そうした激戦下の初年兵時代、私は兵隊として当然生還を期しておりませんので、班長に下士官候補の志願をいたしました。

ところが夜の点呼のとき、恒例の全員ビンタで自分の番がまいりました。山本上等兵はいきなり「貴様下士候志願したな。大タワケ」と一喝^{かつ}され、人の三倍位気合を入れられました。そして「お前は母一人子一人ではないか。志願しないでご奉公を終え、親孝行せにゃいかんじゃないか」と言われ、私はハッとしてその温情に打たれました。

又班長の森田軍曹も、訓練の合間に「ワシが厳しく訓練するのは、敵の弾丸に当らんためだ。分隊長としてお前達を連れて戦うのだ。唯々ご奉公^{くこう}して生きて故郷^{こきやう}に帰れ」と言われました。生きて帰れと言われ、この分隊長のもとで喜んで死にたいと思ったのであります。

この様に軍隊の内部は厳しい中に温い血が通い、親兄弟のような、堅い絆に結ばれておりました。それですから如何に困難な戦いでも遂行されたと思うのであります。

私の家内の兄も、海兵を出て神風特攻隊の隊長で戦死いたしました。私の青年学校時代

の後輩も十八歳で志願し、航空兵として台湾沖で戦死され、もっと若い者も予科練に入隊するなど、当時の青年達は自らの人生を投打って国難に赴いたのであります。

神社新報社では若い人々に読んでもらいたいと「父上様母上様」という英霊のご遺書を発行され、私も読ませて戴き感動いたしました。

そのお一人。牧野海軍大尉は神風特別攻撃隊で、昭和二十年五月十一日南西諸島方面にて二十三歳で戦死されました。そのご遺書には、出撃の前日父上様母上様の書出しで、「人生わずか五十年とは昔の人のいう言葉、今の世の我ら、二十年にしてすでに一生と言ひ、それ以上をおつりと言う。まして有三年も長生きせしはゼイタクなり、いささかも惜しまず、笑って南溟の果てに散る。また楽しからずや、一緒に死ぬのは斉藤幸雄一等飛行兵曹二十一歳のかわいい男です。なぜか私を慕って大分前から一緒に飛んでいます、死ぬのも一緒です。朝めしにすしを食った。あと三時間か四時間で死ぬとは思えぬ。皆元気なり。」出撃、死の数時間前の心境、健気で涙なくしては読めません。

今お一人。第四三二振武隊若尾陸軍少尉は、昭和二十年五月二十八日早朝、沖縄付近にて二十二歳で特攻機で突入戦死されました。出撃の前夜の書出しで、「最後の飛び立つ飛行場は、九州の最南西端知覧飛行場です。ここから六〇〇キロ沖縄にゆき敵艦上に突込み

ます。勿論帰路のガソリンは有りません。若し敵艦が見つからなかったならば、島でも、敵陣地でも、敵の居る処に突込む覚悟であります。」辞世は「身はたとえ愛機と共に碎くとも魂永久に国ぞ護らん」^{たましいとわ}「若桜春をも待たで散りしゆく嵐の中に枝を離れて」帰りのガソリンは無い。若し敵艦が見つからなかったならば、悲壮なる決意と雄々しい姿に頭が下ります。

大本営は、この五月二十八日零時以降、連合艦隊司令長官の作戦指導を解除しました。それは沖縄作戦の山場が過ぎたとの判断により、特攻を止めたのであります。しかしなお戦っている沖縄の三十二軍と、沖縄県民を見殺しには出来ない^とと、陸軍は単独で特攻を続行したのです。若尾少尉は熟練のパイロットで、この日困難な状況下で敵艦突入に成功し、花と散ったのであります。

細川総理は昨年八月十日記者会見で「私自身は侵略戦争であったと認識している」と答え、また社会党の土井たか子衆議院議長と共に、終戦五十周年にあたる平成七年関係各国に謝罪する「国会決議」を行なおうとしております。私たち国民はご英霊に対し、そして日本の将来のため断固阻止しなくてはなりません。すでに神社界では署名運動を実施しており、心ある人々により、一大国民運動が展開されております。日清日露の戦争より、今

次の大東亜戦争は自衛のためであり、侵略では断じてない。西欧諸国のアジア侵略の解放と、国の存立のための戦でありました。将来有為の青年が、大切な一家の大国柱が、国を護るために尊い生命を捧げ、国の礎となられたのであります。これらのご英霊のおかげで今日の日本があるのであります。まもなく二十一世紀を迎えます。日本の前途永遠に榮えるためには、ご英霊のみに心に応えまつり、日本の伝統精神を基盤として、世界の人々と協調してゆかねばならないと思うのであります。

最後に特別攻撃隊の若杉陸軍大尉の辞世を奉唱いたします。

皇国の弥栄祈り玉と散る心のうちぞたのしかりける。

あとがき

平成五年七月十九日より二十一日の三日間に渡り、第九回神道講演全国研修大会・愛媛大会が、松山市の愛媛縣護國神社において、同神社波爾 莊宮司様の御協力の下、盛大に開催されました。

珠に同大会では、佐古幸嬰先生には、大変御健勝にて、私達の講演を一人一人御講評賜り、御指導をいただきました。また、靖國神社大野俊康宮司様（本会顧問）には、御多忙の中、時間をさいて大会に出席され、御講演をいただきました。更に、波爾宮司様にも「お守りします」との演題にて御講演をいただきました。

同大会・総会にて、大野宮司様の格別なるお計らいで、第十回神道講演全国研修大会は、靖國神社で開催することが決定され、平成六年七月二十一日より二十三日までの三日間において、東京大会が靖國神社で開催されました。

同大会では、参加者一同、靖國神社月次祭の参列、並びに遊就館を拝観させていただき、学徒出陣の壮烈なる最後、君国に捧げられた辞世の書・手紙の数々を同志一同涙ながらに

拝読し、慰霊の誠を捧げるとともに、研修では、終戦五十年を迎え、靖國の“神と高まるみたま”と鎮まり座す御英霊の御照覧の下、我等、憂国の神社人の雄叫びは、一に御英霊の大義を高める新たな誓となした大会でもありました。

その上、佐古先生・大野先生には、御講演を戴き、また、御講評を頂戴し、すばらしい大会となり、感謝で一杯であります。

同大会・総会にて、幸いにも同志会皆様の総意により、第九回愛媛大会・第十回東京大会の講話集は、合併号として前回通り、神道教化の一端として刊行することに決定し、書名は、会員の皆様より寄せられた中から『天翔るみたま』と定められ、題字揮毫を大野先生よりいただきました。

表紙の写真は、靖國神社社務所発行の写真集から、転載の御許しをいただいたものでございます。

また、役員任期にともない同総会で、不肖私は、大宮四郎会長（現本会顧問）の後を受けて、会長に就任いたしました。

昨年開催いたしました第十一回神道講演全国研修大会・北海道大会にて、この合併号を配布する予定でしたが、原稿の校正上、配布が間に合わず、大変遅れまして今日に

なつた次第であります。

尚、佐古・大野両先生には、御多忙の中、快く監修をお引受下さり、刊行の運びとなりましたこと、衷心より厚く御礼申し上げます。

また、編集にあたっては、二橋一彦氏（本会前事務局長・愛知縣神社庁参事）、坂 明夫氏（靖國神社権禰宜）、大竹久雄氏（椿大神社権禰宜）の三人が編集委員として、努力いただき、心から感謝いたします。

今後とも同志各位には、御健勝にて一層の御研修を御祈念いたします。

平成八年七月吉日

全国 神道講演研究同志会 会長
第九回愛媛大会・第十回東京大会実行委員長

山 本 行 隆

（椿大神社宮司）

講話集 天翔るみたま

—第9・10回神道講演全国研修大会合併講話集—

平成八年七月一日 発行 頒布料二〇〇〇円 (送料三一〇円)

監修者——佐古 幸嬰

大野 俊康

編集者——

装幀者——全国神道講演研究同志会連絡会議事務局

印刷所——

(資) 光明社

製本所——

発行所——全国神道講演研究同志会連絡会議事務所

〒107 東京都港区赤坂八—十三—二十三 菱興赤坂マンション三〇二 椿大神社東京講本部内

TEL (〇三) 三四七九—三四四一 FAX (〇三) 三四七九—三六一六

振込銀行 住友銀行赤坂支店 普通預金 五〇六七六三

全国神道講演研究同志会連絡会議

落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたします



